

---

# 正義の機竜は無限の蒼穹に甦る

荒涼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正義の機竜は無限の蒼穹に甦る

### 【Nコード】

N1657BA

### 【作者名】

荒涼

### 【あらすじ】

全竜交渉。

その最終局面において、一体の機竜が曇天の空に散った。

正義を掲げた、雄々しき機竜の信念は、滅びることはなく、LOW

- Gへと溶け込んだ。

だが、彼の正義は更に別の場所へも流れ込む。

12のGとは、異なる世界。

無限の蒼穹が広がる世界へと。

注意！

この話は“終わりのクロニクル”及び“インフィニットストラトス”の設定を使用した二次創作です。

両作品のネタバレと、原作改編が多分に含まれておりますので、閲覧の際はご注意ください。また、終わりのクロニクルを先に読んでおくことをおすすめします。

それでも構わん！！又ハハという武将な方。

そうでなくても、まあ見てやるか、との寛大な心で楽しんでもらえば幸いです。

川上稔氏。

弓弦イツル先生。

両作家に感謝と敬意を。

序章 正義の機竜（前書き）

正義は死なず、受け継がれる

竜は無限の蒼穹へ飛び立つ

次の舞台へと

## 序章 正義の機竜

歌が、響いている。

最早、心だけのものとなった“それ”は、その歌を聞く。

それは、聖歌。

聖なる者の生誕を予言する歌だ。

いい歌だ。

素直にそう感じた。

剥がれ落ちていく全身には、何の感覚も無いが、その歌は確かにこの身に響いている。

眼前。

そこに広がるのは曇天。

灰色の景色の中に混じる白は、雪だ。

思い浮かぶのは、一人の女。

普段から強がり、隙を見せない癖に、本当のところは泣き虫で、寂

しがりな女のことだ。

彼女は、今泣いているだろうか。

彼女は、今不安に震えているだろうか。

否。

そんなことはない、と“それ”は思う。

何故ならば、今、自分は証を見せたからだ。

常いかなるときも、自分がいると。

彼女と共にあるという、その証を。

もしも、今は泣いていたとしても、必ず彼女は泣き止むだろう。

そのはずだ。

それを叶える己の正義は、今この魂にみなぎっているのだから。

正義は死なん。そして正義そのものである自分は同じく死なん。ならば、その証を示した彼女と自分は永遠に共にある。証が永遠な

らば。

彼女の涙は、吾輩が止めるものである！

既に、全身の半分近くは失われていた。意識も、定かではなくなつて来ている。

しかし、歌はまだ聞こえている。

ああ、本当にいい歌だ。

これからも、きっと聞くことが出来るだろう。

彼女が、証を見れば思い出す。

彼女と共に、自分はきつと歌っていく。

この世界に遺したものと共に。

『吾輩がいなければ、……勝利はなかつたらう』

“それ”は、もはや何も見ることなく、ただ、こう言った。

『正義は、勝つ！！』

こうして、“それ”は、命を終えた筈だった。

しかし、“それ”が言った通り、正義は死なない。

正義を名乗り、誇りとし、そしてそのものとなった“それ”は。

アレックスという名のその機竜の遺伝詞は。

このLOW-Gだけでなく、無限の蒼穹へと受け継がれたのだ。

そして、舞台は2005年の末から、異世界へと移る。

正しきを通していくことを、ひとつの心意気として。

## 序章 正義の機竜（後書き）

というわけで、いかがだったでしょうか。

……ええ、まだなんも始まってませんね。

ともあれ、こんな感じで進んで行きます。

上手く原作の雰囲気<sup>が</sup>再現出来たら良いのですが。

ともあれ、更新は不定期になると思いますが、長い目で見てやってください。

感想、評価、疑問、修正点など有りましたら、よろしくお願いします。

一章 いつも通りの終わる時（前書き）

終わりは突然

それは必然

構える暇もなく、舞い込んでくる



## 一章 いつも通りの終わる時

太平洋、サンフランシスコ沖から20キロメートル地点。  
時刻は、正午をやや過ぎた頃。

広がるのは、青い色。

雲ひとつない、晴天の空だ。

真下には、時折白い飛沫をあげる波立つ海面が、どこまでも存在している。

それ以外には、何も無い。

青のみが支配する世界だ。

辺りには、微かな波の音と、どこから届いてくる海鳥の鳴き声。  
平穩。

そんな言葉が、当てはまる光景だった。

しかし、不意にそれらは破られることになる。

始めに聞こえたのは音だ。

海鳥の鳴き声ではない。遙か遠くから響くような、甲高い、空気を切り裂く音だ。

段々と音量を上げていくそれは、音源が近づいてきていることを意味していた。

やがて、一帯が音に埋め尽くされた時。  
轟音。

一つの塊が、高速で突き抜けた。

塊は、白い水蒸気の尾を引きながら空を行く。

日光を照り返すそれは、身体の大部分をこの場とは対照的な、緑色の装甲で構成していた。

人型機械。

一言で表すならば、塊は歪なそれだ。

基本的なフォルムは女性的でありながら、各部は角ばった無骨なもので、一種のアンバランスさを感じさせる。

特に、装甲の隙間からは肌色が覗き見えた。中に人間が収まっているのだ。

末端。手足に当たる部分は分厚く頑強な装甲に覆われているため、大きく太いのに対し、中心部分は最低限のパーツにしか守られておらず、非常に華奢だ。

肌色が占める割合は中心部に近づくにつれて増し、腹部や太腿部に至っては、申し訳程度の装甲しかついておらず、むき出しという表現が当てはまる。

表情は見えない。

顔全体が、硬質の物質によって覆われているためだ。

後部、背中には大型の加速機構が備えられており、現在はスラスタを閉じた、通常運航形態である。

各部にはハードポイントがつけられ、その内、両腰は黒光りする細長い金属の塊で埋まっている。

両の肩には、絵が描かれていた。

白地に赤の横線。左上は濃紺の長方形が埋め、その中を規則正しく並んだ白い星が彩っている。

星条旗だ。

その下に、白字で書かれた文字列の中には、一つの名前があった。

『米国防空軍・第三特殊兵装部隊』と。

「……………あーあ」

不意に、声が聞こえた。声は、人型機械の内側から漏れ出ていた。

「せっかく休暇が入ったと思ったたらあ、いきなり呼び出されて任務って、どーいうことよお……………」

若い女性の高い声は、あからさまな倦怠感を滲ませ、間延びしたものだ。

女性は尚も続ける。

「大体、あたしらみたいなかよわい女の子を、こんなモノに乗っけて酷使するなんて。労働基準法はどこ行っただのよー」

そこまで言うとは、女性は項垂れ、ため息をついた。

「……まあ、しょうがないっちゃーしょうがないのかしらね。実質、これを動かせるのは女性だけ。加えて配備数も少ないし。どうしたって人手不足よねー」

インフイニット・ストラトス。通称、IS。

無限の蒼穹という名を持つそれが、女性の身に纏うものだ。数年前の話だ。

極東の島国に住む一人の女性が、この機械を発明した事で、世界は大きく変貌した。

人類の宇宙進出を叶える、新たな翼。

そう謳われた、この高機能型マルチフォーム・スーツは、結果として宇宙開発用という当初の目的を叶える事が出来なかった。

理由は、至極単純。

ISは、そもそも女性にしか起動できないという、致命的な欠陥を抱えていたのだ。

女性の社会進出が盛んになった現在でも、宇宙事業において主導権を握るのは男性である。

とりわけ、宇宙飛行士。実際に宇宙へ飛び立つ素質と経験を持った女性は、数えるほどしか存在しなかった。

いかに、性能が優れていたとしても、それを扱える人間がいないのでは話にならない。

結果、ISは張り子の虎。役に立たない、ガラクタという烙印を押されたのだ。

「そこで、終わってればよかったんだけどねえ」

女性は、思い出す。

未だに記憶に新しい、世界を壊した事件を。

……白騎士事件。

覚えている。

当時、彼女は自宅で家族と共に居たのだ。

その日は、高校も休みで。

久しぶりに家に帰ってきていた父親と、どこかへ出かけようかという相談をしていた。

母親は、せっかくの休みなんだから家でゆっくりしたら、と言っていたが表情はまんざらでもなさそうだった。

いつもと変わらぬ日常。

平穏な、団欒の時間は、突如として飛び込んできたニュースにぶち壊された。

『日本を攻撃可能な各国のミサイル2341発。それらが一齐にハッキングされ、日本へ向けて発射された』と。

血の気が引く、という感覚を知ることになるとは思わなかった。

日本には友人もいる。なにより、発射されたミサイルの中には、当然自国からの物も含まれているのだ。

隣に座っていた父親の手を握る。父親は、心配ない、と笑みを返してくれたが、その表情は明らかに強張っていた。母親は、顔の色を失いながらも、テレビの画面を食い入るように見つめていた。

画面の中のレポーターは、必死に情報を読み上げている。

やがて、画面が切り替わる。日本からのライブ映像だ。

そこには、空の青の中に、鈍い光を反射するおびただしい数のミサイルが映っていた。

父親が、神様、と呟いたのが聞こえた。

その祈りが、通じたのか。

突然、画面右側のミサイル群が、爆発したのだ。

やや遅れて、爆音が届く。

え？ と思った時には、今度は左側でも爆発が起こった。

続けて、中央。

カメラが慌てた動きで振り返った時には、すでにそちら側のミサイルは全て爆発した後だった。

残ったのは、空を埋め尽くす灰色の煙と、空中で光を反射するミサイルの破片。

そして、カメラの中央。

そこに、たった一つ。

あらゆる色にも染まらず、白い人型が浮かんでいた。

「あの後、その“白騎士”が、調査のために駆け付けた艦隊と戦闘機を撃墜。しかも、一人の死者も出すことなく……って、あり得ないでしょー、普通」

後に聞いた話だ。

軍関係の仕事をしていた父が、教えてくれた。

それによると、“白騎士”の“撃墜スコア”は戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母5隻、監視衛星8基。

……ありえないでしょ、ホント。

と言うか、一応機密じゃなかったのだろうか。私に教えちゃって良かったの、父さん。

「まあ、それによって、『現存するあらゆる兵器を遥かに凌駕した究極の性能』が世界に知れ渡ったわけで。ISは見事、世界中の注目を集めたのでした、と」

今では、アラスカ条約の元にISは世界中で運用されるようになり、IS版オリンピックのようなものまで設立されている。

挙句、ISを専門に学び、実用訓練を行う学校なんて“ふざけた”物まで作られた。

一度、査察という名目で訓練内容を見に行つたことがあつたが、あくまでもスポーツの範疇を出ないレベルであつた。それを学ぶ本人たちは、恐らく大真面目なのだろう。

ふざけ半分なわけでも、自分自身に将来、国家の威信がかかる事になるという覚悟がない訳でもないだろう。

だが、足りない。自分たちが動かしている者が、いともあっさり人を殺してしまえる“兵器”であるという、自覚が、だ。

ISが世界に与えた影響はそれだけに留まらない。

各国では、ISの整備と開発に躍起になつて、軍関係者は役立たずとして大幅な解雇が行われた。

ISに勝つことができないような兵器や、人材は無駄と、切り捨てられたのだ。

当然、軍内部からの反発は非常に大きかつたが、ISによつて生まれる利権をつかもうとした政府は、それらを黙殺。多数の軍人や、士官が職を失つた。

……父さんも、その一人。

この前会いに行つた時も、表向きは元気そうだったが。

「落ち込んでたわよね……」

父親の寂しげに笑う姿が、忘れられない。

また、ISの普及と共に広まつたのが、極端な女尊男卑の風潮だ。

ISは女性にしか使えないという点に目を付けた、一部の運動家が広めたもので、メディアの力というのは恐ろしく、ISが各国に配備される頃には世間はそれ一色に染まつていた。

噂では、年々各国の離婚率が上昇しているらしい。

何が理由かは、考えたくもなかつた。

両親は、離婚していない。前と同じく、仲の良いままで。

だが、父親はなかなか再就職が決まらなかつた。

父親は、最後までISの導入に反対していた人間の一人だつた為、不名誉除隊という汚名を着せられた。

両親はその事で謂れもない悪評を浴びている。

男尊女卑の風潮にしがみつくと、みつともない男と、それにしつぽを振る情けない女、と。

そのことが、許せなかった。

ISが、世界を散々にかき乱した拳句、ただの玩具になり下がる現状が。

そのために何人の人間が、生活を壊されたか、気にも留めない世界が。

だから、アラスカ条約違反スレスレの、ISを兵器として試験運用する、この部隊の噂を知った時。

そして、自分にISの適性があると知った時。

……なにか、変えられるんじゃないかって。

「迷わず入隊したんだけど……早まったかなあ」

両親には、反対された。

当然だろう。多くを奪っていったISに、今度は娘まで奪われるのかと感じさせてしまっただろう。

そもそも、この部隊そのものが限りなく黒に近いグレーゾーンにある。いつ取り潰されても、おかしくない。

数か月をかけた説得の末、なんとか了承は得ることができた。

入隊後も、特にへまをすることも無く。気がつけば、少尉なんて肩書きも手に入れていた。

幸い、給料は良い。両親と自分を食わせていくだけの額はもらえている。

任務も、思ったよりは危険が少なく、せいぜいが他の兵器との連携試験や、今行っている哨戒程度のものだ。

IS至上主義の人間たちからのやつかみはあったが、それらも乗り越えてきたのだ。

……まあ、入隊直後の訓練は、死ぬような思いをしたけれど。ともかく、安泰なのだ。今のところは。

「安泰、なのよねえ。……で、なにやってんのかしら、私」  
やりがいがない訳ではない。

むしろ、ISの操縦者も、配備数も少ない分忙しい位だ。ISや適性のある人間は、政府が代表候補生を育てるために奪っていく。

それに、入隊の切っ掛けこそIS憎しの感情であったが、今ではそれだけではないものも持っている。

仲間も、上司にも恵まれ、当初の理念も忘れてはいない。だが。

「毎日毎日、何も変わらないのよねえ」

自分は、本当に前に向かって進めているのだろうか。

この世界を、変えることが出来るのだろうか。

心に浮かんだ疑問を、女性はため息とともに振り払う。

「今のところは、真面目にやるときですか……」

呟きは、空に漂い、消えた。

“それ”は、まどろみの中を漂っていた。

意識は、はつきりとしなない。

何時からここに居て、何故ここに居るのかも思い出せない。

まるで、記憶に白い霧がかかったかの様で。

しかし、それでもいいかとも、思った。

どうせ、何もわからないなら、それでいい。

自分が何者かすらわからない以上、何をすることもできないのだから。

このまま、意識を閉じて、眠ってしまおう。

そう考え、実行に移そうとした時だった。

……呼んでいる。

感じた。

理屈も、合理性も抜きに、そう感じた。

自分を、求めている者がいる。



その瞬間、思考が一気にクリアになった。

……行かなくては、ならない。

何処へ行くのか。何故行くのか。

それすら今は、二の次だ。

何故ならば、“それ”は知っていたから。

呼ばれた者は、呼んだ者の下へ、行かなければならないことを。

そして、こつとも思った。

……きつと、それが自分の在り方なのだ。

それは、驚くほどしつくりときて。

“それ”は、起動した。

……  
ッ？

動き出す。

全身に意識を張り巡らせる。

すると、まず冷たさが来た。全身に染み渡るような、強烈なものだ。

続いて、圧。全身を軋ませるようなものだ。

“それ”は知っている。

ここは、海の中、それも深い位置だと。

理解した瞬間、“それ”は行動を開始する。

軋む身を、持ち上げる。自分には太く強靱な前脚がある。

揺らぐ体を、支える。自分には頑丈な後ろ脚がある。

遙か先、そこに在る筈の空を見る。自分には何処までも見通す視覚がある。

身を震わし、飛び立つ。自分には何処までも行ける翼がある。

“それ”は、海中を突き破って行く。

天上へ、向けて一心に。

身体がさらに軋むが、恐れることはない。自分には何よりも勇猛な魂がある。

主翼を展開。推進機を最大まで稼働させ“それ”は、さらに加速した。

行く。

呼び声は、強くなる。

……行くとも。

そう。必ず駆け付ける。自分には、それを行うだけの正義があるのだから。

そして。

海が、震えたような気がした。

「……………」

何かが、居る。

緑のISを纏った女性は、そう感じた。

「……………これは？」

反射的にハイパーセンサーを起動。上司に叩き込まれた危機回避能力は、それを迷わせない。

直観は、ハイパーセンサーに感じる熱源により、事実となった。

そして、女性は一瞬の驚愕を強引に押しこみ、行動を開始。

全身のスラスターを展開。

そのまま、一気にその場を退避する。

そうした理由はひとつ。

……真下から、何かが上がってくる!?

何か、は猛烈な勢いで上昇してくる。一数える間に、数百メートルのペースだ。

しかも熱源反応の大きさは、ISを遥かに凌駕するものだ。

「なん、だつてのよ!」

底知れぬ恐怖と、動揺。

ああ、変化なんて望むんじやなかった。ビバ平穩。

ハイパーセンサーは、後3秒で何かが水面に到達することを知らせている。

思わず、唾を飲み込む。

覚悟を決めた、刹那。  
すぐ目の前で、海面が爆発した。

何、と思う暇すらなかった。

強烈な衝撃波が、身体を打撃した。

「　　ッあああああああつ？」  
吹き飛ばされる。

世界最強の兵器が、まるで紙屑の様に。

絶対防御が発動し、一瞬でシールドエネルギーが削られ、計器類が警告音を立てた。

信じられない、という思いを咀嚼する暇もない。

搭乗者の危険を察知したISが、強制的に意識をシャットダウンさせようとしてくる。

……今、は、まずい！

救命領域対応とて、完全でないことは知っている。

こんな状態で海へと投げ出され、救助が間に合わなければ、非常に危険だ。

ヘタすれば、祖父母と再会することになるだろう。

生存本能が、身体を動かす。

緊急通信回線を開き、コールする。

コア・ネットワークを利用した通信は、わずかなラグもなく相手に届いた。

『こちら、第三特殊兵装部隊。レベッカ、どうしたの！？』

同僚の声。同じく哨戒任務に出っていたので、チャンネルがつながったのだ。

こちらの状態も、あちらから分かっているのだろう。焦った声が聞こえてきた。

「……こちら、レベッカ。哨戒任務中、正体……不明の機体と接触。

救命領域対応が、発動。……ぶつちやけ、やばいので助けにきてくだ、さい」

それだけ言い終わると、気が緩んだのか意識が薄れていく。最後に、こちらの座標を送信するとレベルカはようやく力を抜いた。ふと、正体不明機が去って行った方向に視線をやる。

一筋、真っ直ぐ西へ向かって伸びていく白い線があった。ウェイパートレイルだ。

まるで、それが東洋に伝わる竜の様に見える。そこで、完全に意識を手放した。

## 一章 いつも通りの終わる時（後書き）

というわけで、一章投稿となります。

いかがだったでしょうか。

といっても、やはりまだなにも始まっていなかったり。

まだしばらくはこんな感じだと思いますが、ご容赦ください。

ああ、原作が遠い。

それにしても、彼。やってることは明らかにひき逃げだよな！。

ちなみに、世界観などうんぬんは“かなり”独自の解釈が入ると思います。

我慢がならない、って方には申し訳ありません。

一人でも多くの人の、暇つぶしになれば幸いです。

では、また次回。

尚、感想、評価、疑問、修正点などありましたら宜しくお願ひします。

追伸。

1月4日20時

少々、描写に変更と追加を加えました。

追々伸

1月5日14時

指摘点の変更をしました。

## 二章 救いの求め（前書き）

少女は求める

助けてほしいと

来てよヒーロー

## 二章 救いの求め

朱。

日本有数の電気街、秋葉原は、夕日に染められていた。同じく、朱色になった秋葉原駅の駅舎前。

喧騒。

そこは、帰路に就く人々の群れで溢れていた。皆各々、目指す場所に向かおうとして肩をぶつけ、互いに頭を下げ合うという光景が至る所で発生している。

休日、それも、夕暮れ時の秋葉原では日常的な光景だ。

通行人の殆どが、手に大きな紙袋を提げているのも、普遍的な光景である。

幾人かは、今日の収穫物を手に話し込んでいる。

「小生、今夜ばかりはハメを外して楽しみますよ！ 大量の戦利品と共に！」

「……どうせ、お前のは皆一様にロリ物ばかりだろう。よくもまあ変わり映えのない」

「あつ！ 何を言うのですか、男児たるもの己の信仰を遵守してこそでしょう！」

「はいはい、良いからおめえら帰るぞー」

小太りの男が、長髪の男に引きずられながら駅舎の中へ消えていった。

その後を、長身の男があきれ顔で追っていく。

そんな様子を、妙な物を見る目で眺める者が居た。人ごみから、少しばかり離れた位置。

街路樹の傍のアーチ状の出っ張りに腰掛ける少女が居る。

肩に、財布等が入った小さなバッグを掛け、薄手のシャツにジーンズという格好。

更識簪。

それが少女の名だ。

セミロングの、内側に跳ねたくせ毛が特徴的が特徴的な少女は、人ごみの中へ入ることを嫌い、この場で人ごみが減るのを待っていた。足元には、アニメ調の絵が大きくプリントされた、大きな紙袋。

『魔法少女マジ狩る　なのか』と書かれたそれを、簪はよく知らない。

クラスの男子が、興奮気味に話しているのは聞いたことがあるが、特に興味は無かった。

簪の興味の対象はその袋の中身にある物だ。

内容量限界まで詰め込まれた、年代を感じさせる特撮ヒーロー物グッズの数々である。

簪は、袋の中身を覗き見、小さく笑みを漏らす。  
一番上。

番組タイトルが見えるように入っている、その箱の中身は。

……超人肅清ソウカツの、シークレットフィギュア……。  
数十年前に放送していた作品のアクションフィギュアである。

PTAや倫理団体やらの講義によって打ち切られた為、そのグッズには希少性があった。

簪にとっては、本日最大の掘り出しものだ。

……第二十五話の、炸裂！　股裂き電気按摩を再現した、少数限定の物。高かったけど、満足。

簪は脳内で、シーンを思い浮かべて悦に浸る。

その様子は、先程の男たちに近しいものがあった。

中学校の夏季休業を利用して、簪はひそかな趣味である秋葉原巡りを実行していた。

目的は、これらレア物のアイテム類の収集である。

日ごろ、なかなかこういった場所には来られない鬱憤をぶつけるが如く買いあさった。

その際、大分散財してしまったが、収穫物の質は、満足の行くものだ。



ただ、心の満足とは反比例するように、財布の中身は寂しいことになっっている。

簷は、財布の中を確認。

中には数枚の硬貨。

……帰りの分の、お金はある。

そう思い、簷は視線を前に向ける。

先刻よりは、人の密度が減っていた。

「……」

簷は、重量のある紙袋を両手で持ち上げると、駅舎内へ入って行った。

足取りは、重量の所為かどことなくふらついたものだった。

目的の駅まで、あと数駅といった地点。

「……？」

疑問。

簷は、首を傾げる。

現在の駅に電車が停まってから数分経つが、一向に電車が動き出さない。

……なにか、あったのかな？

見れば、周囲の人々も戸惑った様子だ。

明らかに苛立っている男性や、不安そうに辺りを見回す学生服の少女の姿もある。

車両内が、険悪な雰囲気にもまれていくのが簷には感じられた。

思わず、身を縮める。

こういった状況は、簷は嫌いだった。

自分が悪い訳ではないのに、何故か居た堪れない気分になるからだ。不意に、電子音が鳴り響いた。

その後、一拍を置いて年配の男性の声が流れてくる。

駅全体に放送される、アナウンスだ。

「本日は、当鉄道をご利用頂き、まことに有難う御座います。大変申し訳ありませんが、人身事故の影響により、一部の線に遅れが出ています。皆さまに、大変ご迷惑をおかけすることをお詫びします」

それを聞き、周囲から憤りの声が上がった。

簪は、すぐ傍で聞こえた舌うち身に小さくする。

しばらくの間、車両内は喧騒に包まれた。

喧騒を構成するのは、主に鉄道会社に対する不満や、罵倒の内容であり、少なからず帰路の心配をするものも含まれる。

やがて、乗客たちは他の帰宅手段を確保するため、車両を下りていく。

携帯電話を使用して、どこかへ連絡を入れている者もいた。

簪も、釣られるようにして車両を下りたが、改札口を出た所で立ち止まった。

……うう。

困ったことになった。

簪が帰宅するには、あの線に乗っていくしかない。

他の線では、とんでもない遠回りになってしまう。

バスやタクシーを利用することも考えたが、バスに乗るには恐らく所持金では足りないだろう。

タクシーは既に他の乗客たちの為に出払っており、乗り場には長蛇の列が出来ていた。

仕方なしに、携帯電話を取り出そうとするが。

「……あれ？ え、嘘。無い……家に、忘れたのかな」

途方に暮れるが、時間ばかりが過ぎていくだけで、問題の解決には至らない。

簪は、線路沿い道を見やる。

……少し遅くなっちゃうけど、歩いてでも帰れる筈……。

結局、簪は徒歩という手段を用いることにした。

手に持つ紙袋の重みが、今ばかりは恨めしかった。

数メートル程の幅を持つ、歩道の上を、簪は歩いていく。

この辺りは普段から人通りが少ない。

休日だというのに、車すらなかなか通らないこともある。

よって、簪は静かな暗い夜道を、とぼとぼと歩くことになっていた。駅から歩きだして、既に数十分。

家まではまだ距離がある。

手の平に食い込む、ナイロン製の紐が気に障るが、苛立つてもしょうがないなと、簪はため息をつく。

……こんな時は、前向きに考えるべき。

数秒考え、散歩だと思ふことにした。

「…………ふう」

一息。

吐息は、夜の空気に溶け込んでいく。

夏の夜は、独特の雰囲気があると、簪は考える。

暦の上では、今は八月の中旬。

頬を撫でる風は温いが、不思議と不快感は感じない。

簪は腕時計を見る。

水色をベースとしたシンプルな作りのそれは、同級生にして幼馴染である布仏本音からプレゼントされたものだ。

デジタル表示で示される時刻は、午後6時半。

本来ならばそう暗くもない時間帯だが、今簪が見る景色は、濃墨色に染まりつつある。

ふと、視線を上に向ければ、そこには灰色の雲に覆われた夜空がある。

分厚い雲は、確かにその向こうに存在する筈の星空を覆い隠し、時刻にしては深い闇を、街へと提供していた。

雲の薄い所からは、僅かに月の明かりが漏れ出ている。

それが照らし出す雲の隆起は、一種の不気味さすらも醸し出している。

まるで、異世界へつながっているようだな、と簪は思った。

あの雲の向こうには、夜空ではなく別の物が広がっているのではないか。

……流石に、それは妄想が激しすぎると思う。

どうにも、自分にはそんな癖があるようだ。

平常からして、クラスメイトからも何を考えているのか分からない、と言われる事がある。

他人から見れば、自分は浮いた存在なのだろう。

……あの人とは、大違い。

一人の女性が、脳裏に浮かぶ。

その人は、自分とは正反対に位置するような人種だ。

何時も明るく、皆の信望も厚く、頭も良く、運動もできる。

まるで、世界を回しているのは自分自身だといった風の、飄々とした態度。

そして、それら全てを他人に受け入れさせるだけの、絶大な度量と魅力。

気がつけば、何時でも何かの中心にはあの人がいる。

自分とは、違う。

自分は、どれだけ努力した所で、あの人には追いつけないのだろう。根本的な、作りが違うのだ。

結局自分は、あの人の付属品でしかない。

否。

付属品にすらなれないのかも知れない。

簪の家は、ある特殊な事情を抱えている。

それゆえ、簪に対しても様々な思惑や、視線がかけられていた。

滅多に外出は出来ないし、出来たとしても、必ず護衛が付けられた。だから、今日は朝早くから黙って出てきてしまった。

……あの人に、心配かけたかな。  
ふと、そんな事を考えてしまった。

あの人。

そう、あの人だって、自分と同じ様に、自分の現状を窮屈だと感じているのだろうか。

もしかしたらそうかも知れないし、あるいは、そんな事考えてこと  
すらないのかもしれない。

……わからない。

あの人のことが、分からない。

心の中に、重しが落ちる。

知らず知らずのうち、簪は唇を噛んでいた。

これは。

この感情は、嫉妬なのだろうか。

それすらも分からない。

嫌悪では、ない筈だ。

その筈だと、簪は半ば祈るように胸の内で繰り返す。

眼前には闇。

まるで、それが自分を押し潰そうと迫ってくるような錯覚を覚え、

簪は慌てて下を向いた。

……いけない。

どうにも、気分がダウンーの方向へと向かっている。

前向きに考えるつもりが、いつの間にか後ろ向き。

こんな所も、簪は自分の悪癖だと感じ、嫌悪感。

何か、いい気分転換は無いだろうかと思うが、周囲には何も無い。

気がつけば、車も通らず、人の気配もない道に独り。

「……」

静寂。

一度自覚してしまうと、それは急に強調されて感じられた。

やけに、周囲が静かだ。人通りは一切無い。

すでに、辺りは暗くなっている。

所々に設置された街灯の明かりは、小さく頼りない。言い知れぬ不安の様なものが、胸に広がり、簪は心なしが早足になる。

早く。

早く家に着いてしまおう。

距離にしたら、あと数百メートル程の筈なのだから。

そう思い、さらにペースを上げた瞬間。

それは、来た。

「まだ簪ちゃんは帰って来ないの？」

そう言ったのは、更識楯無。

セミロングの髪を、簪とは対照的に外側へ跳ねさせた少女だ。

整った容姿と、モデル並みのプロポーション。

成績は常に学園トップを維持し、多数の武術を実践のレベルまで習得。

クラスメイトだけでなく、教師や、周囲の大人たちからの信頼も厚く、また、確実にそれに確実に応える。

さらには中学二年生という年齢にして、専用のISすら所持し、IS学園からの推薦枠が既に確保されているとの噂まである。

正に、完璧超人を絵に描いたような人間。

そんな彼女の正体。

日本という国家の、暗部。

その中で、裏工作の類を実行する暗部に対する、言うなれば、対暗部用暗部の一家。

更識家の長女にして、第十七代当主。十七人目の『楯無』の名をもつ少女である。

しかし。

「簪ちゃん、早く帰ってこないかしら」

そんな彼女も、妹である更識簪に対してはただの姉でしかない。

少なくとも、楯無自身はそう考えており、帰りの遅い妹の身を案ずるのは、当然の事だった。

「お嬢様。心配なのはわかりますが、その質問はもう五回目ですよ」  
楯無の言葉に答えたのは、一人の少女。

やや呆れの混じった口調。

しかし、その中には妹を純粹に心配する姉という存在に対する、親愛の情が込められていた。

「だって、心配なもの。可愛い簪ちゃんが、危ない目に遭ってないかって考えたら、落ち付いてなんか居られないわ。そうでしょ、虚」と呼ばれた少女は、眼鏡を人指し指で持ち上げると、ため息を一つ。

「そんな事を言っつて。簪様が出かける際、護衛の者をつけたでしょう？」

「あら。知つてたの？」  
どこから取り出したのか。

広げた扇子で、笑みを隠し、楯無は言った。

「簪様にはばれないように、別々の場所に待機させた数人で、交互に見張るなんて」

「そうね。簪ちゃんの乗っていた電車が、途中で止まっちゃった時は少し焦ったわ。同じ車両に乗つてた護衛に付けさせる訳にもいかないし」

「確かに、同じ車両から下りた男が、ずっとつけてくるのは怪しいですね」

「だから待機していた護衛を、急いで簪ちゃんが下りた駅に向かわせたのよ。さつき連絡が入ったし、そろそろ帰ってくる頃でしょうね」

ふふ、と楯無は笑う。

その笑みは、口調とは裏腹に、眉尻を下げた寂しげなものだった。

「本当は、簪ちゃんにこんな事したくないけれど、ね。四六時中見

張られるなんて、女の子ならいい気分じゃないでしょ？ ……もつと、自由にさせてあげたいけれど、私の立場じゃ、そうもいかないしね」

そう言った楯無を、虚は悲しげに見た。

……お嬢様には、楯無としての使命がある。  
虚は知っている。

目の前の、愛しい一つ下の幼馴染にして、敬愛する主人が、飄々とした態度の裏では国家レベルの重圧と責任を背負っていることを。暗部とは、読んで字の如く暗い部分を司る者達。

かけて、フィクションの中の様な派手で楽観的な世界では無い。

そこは、シビアで、残酷な世界だ。

本来なら中学生が踏み込んでほしくないような汚れた現実や、血みどろの闘争が渦巻く魔窟。

そんな中で、楯無は戦ってきた。

どれだけの、苦痛だろう。

どれだけを、我慢しているのだろう。

傍にいる自分自身ですらも、きっと彼女の全てを理解できてはいないのだろう。

楯無は、自分の事に他人を必要以上に関わらせない人間だ。

人たらしなどと言うあだ名は、むしろ、他人と一定の距離をとるための方便にすら見える。

彼女はたった一人で、全てを抱え込み、そしてその上で飄々と笑って見せるのだ。

……叶わない、ですね。

だからこそ、支えようと決めたのだ。

更識楯無という、一人の少女を。

虚が、決意を新たにした時、楯無は既に元の飄々とした笑みに戻っ



ていた。

「さて、じゃあ、偶にはこっちから迎えに行ってみようかしら？  
ふふ、簪ちゃんの驚く顔が目に浮かぶわ、きつと可愛らしいでしょ  
うね」

……この人は。

思わず、肩の力が抜ける。

すると、楯無はこちらへウインクをして見せた。

どうやら、顔に出ているらしい。

……本当に、叶わない。

苦笑が漏れた。

「虚も一緒に行く？ 本音は……寝てるかしらね」

返答を返そうとした、その時。

それは、来た。

白。

空を染め上げる、閃光が、天上から大地へと走った。

それは、莫大なエネルギーをもって、降り注ぎ、着弾した。

一瞬、意識が飛ぶだけで済んだのは幸運だった。

突然、視界が真っ白に染まり、耳をつんざくような轟音が響いたの  
だ。

天が落ちてきた。

簪は、その惨状を見て、そう思うしかなかった。  
目の前にあった筈の、自宅が、無くなっている。  
否。

吹き飛ばされたのだ。先ほどの、閃光によって。

いつの間にか、視線が下がっている事に気づく。  
知らず知らずのうち、膝から地面に崩れ落ちていたのだ。  
しかし、簷にはそんな事を気にする余裕はなかった。

「……………あ、ああ、あ……………！」  
視線が歪む。

口から、意味を伴わない喘ぎが零れる。

それは、絶望。

一瞬にして、自分の家が。

そこにいた人たちが。

あの人が。

消えてしまったのだ。

「あ、あああああああああああああつ？」

叫ぶ。

ただその他に、どうする事も出来なくて。

すると、声が聞こえた。

知らない、女性の声だ。

「……………あら、まだ生き残りがいたの」

簷は、反射的に視線を向ける。

その先にあるのは、歪な人型。

IS。

史上最強の兵器が、こちらに銃口を向けていた。

……………あ。

死ぬ。

皆と同じ様に、跡形も残さず。

「悪いわね、これも仕事なのよ。恨んでもいいけど、化けて出ない

でね。 面倒くさいし」

言葉と、引き金が引かれるのは同時だった。

撃音。

それは、目の前のISから響いた。

引き金は、目の前のISが引いたものではなかった。

「あら……?」

「私の、可愛い妹に、手え出さないでくれるかしら?許さないわよ」  
良く知った声。

簪は、目を向けた。自分の、姉へと。

目に映るのは、水色。

装甲の所々を欠損させ、焦げ付かせながらも、未だに健在。

IS：グストロイ・トウマン・モスクヴェを纏った、最強の姉が、  
そこに居た。

閃光が走った瞬間。

楯無が、やった事は単純な事だった。

即座に、ISを展開すると、閃光に対して自ら突っ込んだのだ。

全ての装甲を、前面に集中させ、シールドエネルギーを犠牲に攻撃  
のエネルギーを受け止めたのだ。

結果、エネルギーの干渉の余波で生まれた衝撃波が、家を吹き飛ば  
すだけに留まった。

屋内に居た人間は、殆どが気を失っているが、死人は一人もいない。  
…… 本当は、ちょっとした“小細工”も加えたんだけど。上手く  
行ってよかったわ。

もしも、“小細工”が失敗していたとしたら、間違いなく死人が出  
ていただろう。

それ以前に、シールドで攻撃を受け止める事自体が成功していなけ  
れば、家諸共、今頃は消し墨だ。

自分でやったことに寒気がするが、今はそんなことよりも大事なこ  
とがあった。

「あなた。随分と派手な挨拶をくれたけど、何処の誰かしら? マ  
ナーがなっていない女は、誰にも相手をされないのよ」

答えるとは、思っていない。ただのブラフだ。

問題なのは、相手がどのような戦力を持っていて、どのように使うかを見極める事だ。

余裕のある態度と反対に、楯無は今までに感じた事が無い程の焦りを秘めていた。

……どうにか、この状況を切りぬけないと。

楯無の思考に対し、女は不用心な程無防備な、棒立ちの姿勢だ。

女はそのまま、言葉を返してくる。

「あら、ノックのつもりだったんだけど。ごめんなさいね、まさかこんなに脆弱だとは思わなかったのよ」

「ノックのやり方も知らないのね。どこの馬の骨とも知らないけど、お里が知れるわよ、おばさん」

言葉と同時に、観察を開始する。

黄色と茶色の、ずんぐりとした体形のISだ。

右手には、先程の閃光を放ったと思しき長銃。両肩には、用途不明の球状の機構が備え付けてある。

楯無は特技の一つでもある、並列思考をフル稼働させる。

……見た事の無いタイプ。恐らく、出力的にも、正規軍用のISでしようね。目立った点は、あの長銃と、両肩に付いた丸い機構。恐らくは、長距離射撃型でしょうけど、まだ確定は出来ない！

「……小娘が、偉そうな口をきいてくれるわね。まあ、いいわ。どうせこれから死んで行くのだから。少しぐらいは言いたいこと言わせてあげるわよ、お嬢さん？」

「そう、ありがと。体型に似合わず、案外お優しいのね」

……思ったよりも、理性的だわ。だとすると、この状況、……最悪かも。

戦慄。

楯無は、確かにそれを抱いた。

相手が逆上するか、そうでなくても、ここで攻撃を仕掛けてくるタイプならばやりようはいくらでもある。

しかし、この相手は、攻撃してこない。明らかに不利な状況の相手

に。

背後に動けない人間を置いた、回避行動が不可能な状況にある相手に、だ。

……前者ならば、ただの考えなし。隙をついて、接近戦に持ち込めばいい。後者ならば、功を焦る愚か者。攻撃の誘導も容易い。

だが、そうでない場合は、厄介だ。

いつでも殺せる、という事を理解し、その上で慢心しない。

間違いなく、この女はプロフェッショナルだ。

「あら、これでもスタイルは良い方なのよ？ 仲間内でも褒められるくらいなんだから」

「……へえ、仲間がいるの」

わざわざ、こちらから聞き返してやるが、女の態度は崩れない。

……ブラフか。否、恐らく、仲間が居るといっことは事実。それに、話を終わらせようとする意志が見えない。普通なら、さつさと始末して、逃げれば良いのに。……まさか、逃げる必要が、そもそも無い？

だとすると、非常に恐ろしい仮定が成り立つ。

……サイレンの音が、聞こえない。

あれだけの爆発があったにも拘らず、未だに緊急車両が現れない。

また、野次馬も出てこない。

話を引き延ばすだけで、焦る様子が全くない。

「……あなた、この辺り一帯を、完全に包囲してるのね。住民達は、人質ってわけ？」

言っと、女ははっきりと表情を変えた。

笑みを作ったのだ。

肯定の意味を持つ、笑み。

楯無は、齒噛みした。

……やられた。

これは、どうしようもない。正直お手上げだ。相手は、大規模な勢力でもって、“更識”という暗部そのものを滅ぼしに来たのだろう。

ただ、人員を殺すだけではない。ありとあらゆる情報を引き出し全てを奪い取っていくか、或いは跡形もなく、この地上から存在を消すつもりだ。

初撃も、当主である自分一人だけが残っていれば幸運、という判断の下に行われたのだろう。

多数の人質と引き換えの、情報搾取の為に。

最悪、こちらが暴れて、何も手に入れられない事すらも想定の上で。そして、最後には、皆殺すのだ。

楯無は、目を閉じた。

まさか。

まさか、こんなにもあっさりと。

まだ、なにも、始まってすらいなかったのに。戦うことすら、出来なかった。

「……最後に、一つ聞かせてもらえるかしら」

「なにかしら？」

ああ、その余裕綽綽といった表情が憎たらしい。

「あなた達の目的は？」

「陳腐な言い方になるけど、そうね」

世界征服よ。

「……ふ、ふふ」

何ということか。正しく、相手は悪の秘密結社ではないか。

正義の味方は、ここにはいなかった。

……あーあ。

そこで、始めて。

楯無は、妹へ視線を向けた。

視線を向けられた簪は、一瞬で頭が真っ白になった。

……なんで。

急展開の連続に疲れ切っていた心すらも吹き飛ばす、不理解の感情。簪には、理解が出来なかった。

何故、こんなことになっているのかも。

何故、都合良くヒーローが現れないのかも。

何故。

……あなたは、笑っていられるの？

「ねえ、さん」

「簪ちゃん」

名前を呼ばれ、びっくりとした。

姉は、それに傷ついたような表情を、一瞬だけ作ると、すぐにいつもの飄々とした笑みを浮かべ。

「ごめんね、負けちゃって」

頭を、ハンマーで殴られた様な衝撃が、簪を襲った。

簪は、見る。

ずっと、届かないと思っていた姉の姿を。

常に凜々しく、気高く有り続けた姉の姿を。

飄々とした笑みを浮かべながら、静かに涙を流す、姉の姿を。

「ずっと、負けないようにしてきたけど、もう駄目みたい。ごめんね、最後まで、強く居られなくて」

姉は、続ける。

「ごめんね、守ってあげられなくて」

その瞬間、今まで簪の中で燻っていた、全てのわだかまりが解けた。そして、理解する。

何故、こんなことになっているのかも。

何故、ヒーローが都合よく駆け付けないのかも。

何故、姉が笑っているのかも。

それら全ては、姉が全てを背負ってきたからだという事を。

……私、を、守るために。

理解した途端。

「……な、さい」

簪は、溢れるほどの感情を、爆発させた。

「ごめんな、さい。ずっと、ずっとねえさんを、ねえさんに嫉妬していて、ごめんなさい。ずっと、ねえさんに頼り切っていて、ごめんなさい。ずっと、ねえさんを、独りにして、ごめんなさい……」

……！

「簪、ちゃん……」

最早、姉を見ていられなかった。

申し訳なさと、自己嫌悪と、有難さが入り混じって、どうしたらいいのかわからなかったから。

なのに、姉は言うのだ。

世界一強くて、優しい姉は、私に言うのだ。

「簪ちゃん。貴方は、私に謝らなくちゃいけない事なんて、何一つ無いの。だって、ほら」

お姉ちゃんが、妹を守るのは当たり前のことなんだから。

簪は、ただ祈った。

「さて、そろそろいい？ 良いもの見せてもらったけど、まあ三文

芝居ね」

……… お願い、します。

「あら、お金で買えないくらいの価値があったと思うけど」

……… お願いします。

「価値つてのは、万人に共通の物じゃないと意味なんかないのよ。で？ 貴方はどんな価値をくれるの？ 情報？ 機材？ 人員？ 権力？ それとも俗っぽくお金かしら。感動のエンディングなんて



のはいらないわ。この世界はおとぎ話じゃないんだから」

……もう、なにも要りません。

「浪漫をなくした人間って、腐っていくだけだと思わない？」

……だから、今だけは、都合のいい奇跡が起きてください。

「……そろそろ、飽きてきたわね。この問答も。選りなさい。私たちに下るか、死ぬか」

……助けてください。

「……言ったでしょう。貴方達は、許さないって」

……だれか。だれか。

「じゃあ、死になさい」

「誰か、姉さんを、助けて！」

『 J u d ・ 《 ジャ ヅ ジ メ ン ト 》 』

そして、“それ”は、来た。

呼び声に応えるため。

己の正義を果たすため。

正義の機竜は、己の最速でもって、少女の下へ駆け付けた。

## 二章 救いの求め（後書き）

いかがだったでしょうか。

……はい。

やっちまった感がどうしようもないですね。

この時点で、原作から大きく逸脱することになります。

もうついてけねえよ、って人は申し訳ありません。ホント、すいません。

見てやるよ、って人は感謝感激です。

感想、評価、疑問、修正点などありましたら、宜しくお願ひします。

さあて、次回はスー　ーヒー　ータイムだ

追伸

1月5日16時

大筋は変わってませんが、描写の補強と変更をしました。面倒をおかけして申し訳ありません。

### 三章 自分らしさの自問自答（前書き）

少女は証明する、己が最強だと

竜は確信する、己が正義だと

近いようで異なる線は、今ここで結びあう

### 三章 自分らしさの自問自答

その日。

空を見上げていた者は、見ただろう。

音速すらも凌駕したスピードで空を駆けていく、一筋の陰りを。

震えたのは、大気か。

それとも、己自身の身体だろうか。

簷は、音も立てずに目の前に現れた、巨体を見つめる。

竜だ。

……あ、……。

圧倒される。

全長は、三十メートルを超えるだろうか。

ファンタジー小説に出てくるような、西洋竜。それを、前後に引き

延ばした様なシルエットが、山のように聳え立っている。

色は、鈍く重い光を湛えた、鋼。

竜の身体は、鉄でできていた。

全身は、無骨な装甲に覆われ、所々には何かを接続する為のハードポイントや、展開すると思しき切れ込みが走っている。

……機械の、竜。

簷は呆然とした表情で、立ち尽くす。

確かに、自分はヒーローを望んだが、まさかこんな大物が出てくるとは。

むしろ、この光景は現実なのだろうか。

そう思いふと横を見ると、姉と、姉を襲っていた女も、自分と同じく呆然としてこの乱入者を見つめている。

どうやら、現実らしい。

『 少女よ』

「ひ、ひやいつ!?!」

竜が、喋った。

若い、男性の声。

それが口元の辺りから響いてきたのだ。

思わず、奇声じみた返答を返したが、竜はどこか満足そうな様子で。

『 少女よ。吾輩を呼んだのは、貴様か』

「!」

竜の言葉に、簪は、はっ、とする。

……この、竜は……私が呼んだから、来たの？

私の為に。

姉さんの為に、来てくれたのか。

ならば。

簪は、頷いた。

竜に対して、最早怯えも、疑問も無く。

『 そうか』

竜が、笑ったような気がした。

『 ならば言おう もう、大丈夫だ』

その言葉に、簪は例えようのない安堵感が胸に広がるのを自覚する。

そして、確信する。

この機会の竜は、自分が望んだ、ヒーローなのだ。

異常事態だ。

黄と茶のISを駆る女は、そう思った。

目の前の、イレギュラー。

それは、本来この場に居ない筈の物。

更識家から半径500メートル以内は、こちらの手の者が完全に封鎖している筈だ。

ある者は、警察の検問の偽装。

ある者は、舗装工事のふりをして。

敢えて通した、更識簪以外は、例えそれが、ISであろうとも侵入できない程の準備をしていた。

更識簪に付いていた護衛も、その悉くを処理することに成功している。

そもそも、情報統制も完璧にしておいた筈だ。

更識家にすら悟られること無く、この一帯の様子が、外部へ伝わらないよう根回しを済ませておいた。

例え、ここで戦争が始まるうが、誰一人として気が付かないようなレベルで。

それを可能とするのが自分達であり、今までもその通りにやってきた。例え、数十人単位で人が消えようが、その事実を知る者がいなければ、いずれは風化する。

いつも通りに仕事を遂行し、後はほとぼりが冷めるまで潜伏すればいい。

だからこそ、自分も焦ることなく更識楯無を追い詰める事が出来たのだ。

誰も来ない筈で、誰にも知られない筈のこの仕事を。

だが、それらの“筈”は、こうしていとも簡単に破られた。

故に、女の心境は荒れ狂っていた。

何故。

何故。

何故。

頭の中を、疑問符が埋め尽くす。

そして、それは口を突いて飛び出した。

「なんなのよっ？ 貴方は一体！？」

竜へと、叫んだ。

……何なのか、であるか。

竜は、叫びに対して思考する。

実際の所、自分でもわかってなかったりする。

最初に少女に放った、あの言葉も、ただなんとなくそれが一番しっくりきたから使っただけだ。

……“jud.”……吾輩は、それを応答の意味として使っていたのである。

記憶が、ある。

そこでは、自分はだれよりも強く、誰よりも勇ましく、誰よりも正義だった。

生身の体を機竜と化し、一人の女を、もう二度と泣かせない為に戦っていた。

その過程で争った、対極の世界の住人達。

彼らは、悪役などと名乗っていたが、自分から悪を名乗るなど、酔狂な集団だった。

……思えば、奴らは常に奇怪なテンションであった。狂っていたとしか思えん。きっとそうだ。

そう言えば、最後の方で戦った、青と白の機竜。あれも同じく狂っていた。

狂ってはいたが、奴は、速かった。

そして、悪を名乗る癖に、自分の正義と対極の、奴自身の正義を持っていた。

それは、狂った集団達も同じだっただろうか。

今となつては、確認ができないが。

……最後はその狂った集団に、手を貸してしまったな……。  
覚えている。

自分の中にある、最後の記憶だ。

ただ、自分自身の正義を通す為に。

仲間と、仲間がこれから生きていく世界を続けさせる為。

乱気流の中を、飛んだ。

世界を白紙にする、天輪を突き破り、空へ昇った。

正義が勝つ事を、証明して見せた。

そして、雪降る曇天の中で、歌を聴きながら終わった。その筈だった。

……だが、吾輩は今ここに居るのである。

記憶の中の自分と、今の自分は違っているという思いがある。証拠もある。

……身体が、マイナスに侵されていない。

あれほどまでに、身を苦しめた呪い。

身を、剥がれさせていく概念は、今の自分の中からは消え去っている。

……分解した筈の身体は何もかもが揃っている。

弾薬も、賢石燃料も、ここに来るまでに消費した分を除いて最大まで充填されている。

あの時、捨て去った骨格フレームですらも。

身体の構成するものは、ねじの一本に至るまで揃っているのだろう。ある意味では、自分の一部でもあったマイナスを失い、その代わりに失われた物によって構成される自分は、一体何者だろうか。

……吾輩の中にある記憶は、今ここに居る吾輩の物だろうか。

名の無い竜は、少女を見る。

自分を呼んだ少女だ。

その表情は、いくらか険が抜けたものの、未だ強張ったままだ。

……吾輩の、正義が足りていない為か。

自分自身を、自分自身だと確信できない。

そんな迷いの為に、少女の不安を完全に吹き飛ばせないでいる自分が歯がゆい。

ふと、見れば目の前に女が居る。

黄と茶の機械を纏った女だ。

その表情は、明らかに焦れてきている。



……正義が名乗るのを、待ってられないとは。

状況的にも、自分の信条的にも、女は悪だ。間違いない。しかし、そうならば尚更名乗らなければなるまい。

だが、自分出来るだろうか。

不安では無い。

しかし、疑問を抱きながら言葉を発しようとしたその時だ。

『！』

気付く。

自分の身体、その一か所。

一つだけ、小さな穴があいている。

それは。

……ボルトを固定する為の、穴……。

全て揃っていると思っていた、自分の部品。

欠けたそれは、その個所は。

……ふ。

込み上げてくる物がある。

それは、確信。

自分自身を決定づける、強い確信だ。

……いつ如何なる時も、共に居る証。それを、一時とはいえ失念す

るとは。……怒られてしまうな。

そうだ。

証は、彼女と共にある。ならば、自分自身も、彼女と共にある。

彼女と共にある、自分は。

……紛れもなく、吾輩である！

全てが、噛み合った。

最早、竜は迷わない。

記憶の中から呼び覚ます。

仲間たちに呼ばれていた、自分の名を。

竜は、今一度女に視線を向ける。すると、女が怯むのが分かった。

馬鹿め、と竜は思う。

正義を目の前に、怯んだ貴様は悪だ。  
悪に対し、自分自身の名を、堂々と告げようとして。  
……だが、そのままではひねりが無い。  
余計な事を考えた。

『 聞け！ 悪の手先よ！』  
竜が吠える。

『 吾輩は、生まれ変わった、正義の使者！』  
翼を広げ、言った。

『 アレックス・RX！』  
空気が凍った。

楯無は、鼻の下が左右に広がるのを自覚した。

……え、ええー……。  
メガトン級の倦怠感が、襲いかかってくる。  
既に自分のライフはゼロだ。勘弁してほしい。  
しかし、良く見ると、自分の愛しき妹は。

……目、輝かせちゃってるわー……。  
一体、どこで育て方を間違えたのだろう。お姉ちゃん心配です。  
ライフがマイナス方向にコストするような感覚。本当に、勘弁し  
てほしい。

崩れ落ちそうになる身を、最後に残った気力のみで支える。  
色々、台無しになった雰囲気だが、それでも未だ脅威は去ってい  
ないのだ。

……気を、抜くわけにはいかないわね。  
楯無は、構える。

『ふむ……、語呂が良くないな。なので、やはり今まで通りアレックスと名乗らせてもらうのである。覚えておくがいい』  
追撃が入った。

今度こそ、史上最強の姉は膝を突くのだった。

台無しだ。なんかもう、色々、駄目だ。  
何もかもがどうでもよくなる感じだ。

ふと、妹がこちらを心配そうに見ているのが見えた。

……ああ、優しい子だわ。大丈夫よ、お姉ちゃん、別に怪我とかした訳じゃないから。ただ単に、気が抜けちゃっただけだから。主にあの竜の所為で。

言ってあげたいが、口を開くことすら面倒くさい。

こんな姿は、虚やクラスメイトには見せられないだろう。

視線を回すと、敵対していた筈の女は、ピクリともせず宙に浮いている。

表情は見えないが、なんとなく同情心が湧いた。

『 その貴様』

聞き流したい声が、こちらに放たれた。

「……何？ 助けしてくれるんでしょう？ それとも何か質問でも？」  
嫌味を込めて言ってるやが、竜は気にした風も無く。

『 ああ、貴様が少女の姉であるか？』

……何を言っているのかしら。

「何？ あなた姉好きだったりするわけ？」

『 否、今一度守る対象を確認しておこうと思ったただけである。もう一度聞くぞ、貴様が少女の姉であるか？』

冗談も通じない。どうやら、この竜と自分とはとことん相性が悪いようだ。

「そうよ。私が、簪ちゃんの姉。更識楯無よ」

『そうか。ならば』

「ただし。守るってのは無しよ」  
断言する。

すると、竜は押し黙った。

……あら、意外と可愛げがあるじゃない。

笑みが出そうになるのをこらえ、言つてやる。

「ただ、守られているだけってのは性に合わないのよ。それに、簪ちゃんは、私の事を守って、だなんて貴方に言つてないわ。助けて、っていったのよ」  
助

それに。

「第一、今のところ私。簪ちゃんにカツコいい所見せてないのよ。

だから、手伝つて。貴方が助けてくれるなら、私は戦える」

楯無は、思つ。

……そうよ。私は最強なのだから。

何かもう駄目、だ。何を勝手に諦めているのだ。

更識『楯無』は、こんな悪党どもに負けていい存在じゃないのだから。

虫のいい事だと分かっている。偉そうに言えた口では無い事も分かっている。

だが。

……簪ちゃん。虚。本音。

皆、自分の大事な人だ。

簪ちゃんは、驚いたように目を丸くしてこちらを見ている。

虚は、未だ目を覚まさず、自分の後ろで壁にもたれかかっている。

本音は、さつきちらりと見たらまだ寝ていた。どんな神経をしているのだろうか。いや、気絶しているだけなのかもしれないが。

それ以外にも、更識の家の人々。どんな形であれ、彼らは家族なのだ。

それら全て、守ると決めたのだ。どんな事をして、自分が、だから。

「お願い。力を貸して……！」

そう言つと、竜はぶつぶつと何かを呟いた。

『……まったく、吾輩は、どうもああいふタイプに縁が……』  
やがて、竜はため息に似た音を漏らすと。

『……いいだろう。足を引つ張るなよ？』

「ふふ、まあ。私のやる事は終わったし、始めましょうか」  
言つて、楯無は女に向き直つた。

すると、女はこちらを見ている。

「……おしゃべりは、終わった？」

その表情は、能面のような無。

取り繕うだけの余裕が、すでに無くなっているようだ。

「ええ、有難う。わざわざ待っていてくれるなんて。よほど余裕が御有りなのね？」

そういつた瞬間、女の表情は一変した。

「……ふざけるな？」

女は顔を歪め、怒気も露わに捲し立てる。

「こつちが下手に出ていれば、つけあがりやがって！ 戦える！？

何寝言言つてんのよ！ あんた、今の自分の状況わかつてるの？

あんたのISはボロボロ、おまけに後ろには戦えない人間を庇い、  
こつちには人質が居るのよ！ この状況で、どう勝とうつてのよ！

？」

言っている内に、自分の言葉で余裕を取り戻したのか、女は急に笑顔を作る。

もっともそれは、感情の高ぶりによる、歪な笑みだった。

「そうよ。人質よ！ 分からないようだから言つてあげるけど、この辺り一帯の世帯、一つ一つが全て支配下にあるのよ！ しかも、今すぐにでも人質の頭を吹き飛ばせる状態だね！」

女は、小さな灰色の物体を取り出した。

楯無が眉を顰める。

「さあて、これはなんでしょう？ 答えは、爆弾の起爆装置よ。眠

らせた人質のすぐ傍に置いてある爆弾が、このスイッチ一つで作動するの！ どう？ 素晴らしいと思わない？ 家族そろって送ってあげるんだから、親切よねえ？」

「やめなさい！」

楯無が叫ぶと、女はさらに笑みを深くした。

「やめてあげないわ。言つとくけど、この起爆装置が破壊され、信号が途絶えた時にも爆弾は作動するのよ、万事休すってやつね。…さあ、どうするつもり？ 偉そうなことを言っておいて、この様なら、大した喜劇ね！」

女は、言葉が終るや否や、起爆装置のスイッチを押しこんだ。

「……そんな」

漏れた声。

それは、女の物だった。

「どうして、どうして爆発しないのよおっ？」

「だから、やめといたほうが良かったのに」

すぐ傍で聞こえた声に、女は反応する。

だが、遅い。

女の作りだした隙は、更識楯無という相手を前にして、致命的だった。

女が見たのは、既に至近距離まで近づいてきていた水色のISの姿だった。

楯無が呼びだした、小型ブレードが走る。

一閃。

女は、大きく弾き飛ばされると、地面に叩きつけられた。

「きゃあああああっ！」

女のISの、シールドエネルギーが激減する。

女は、叩きつけられた時のショックで喘ぐが、楯無は容赦しない。

ラビットスイッチ  
高速切替。

小型ブレードが消え、代わりに現れたのは大型のガトリングガンだ。既に照準は、女のISへと付けられている。

引き金を引けば、弾が出る。

「や、止め……」

怯えた表情の女に、楯無は飄々とした笑顔で返す。

「やめてあげないわ」

引いた。

弾丸の初速度は音速を超え、目標へと吸い込まれていく。

着弾と同時に、装甲が破碎した。

黄と茶のISはそれぞれの色彩を飛び散らかす。

黄と茶のISは装甲の面積を一瞬の内に減らしていき、やがて。

「……？」

救命領域対応が発動し、女は意識を手放した。

ISが強制解除され、倒れ伏す女を楯無は見つめた。

「ふう……」

起爆装置を回収してから、ようやく一息つく。

またも、小細工に頼ることとなったが、良しとする。

『ふむ……、一体、何をしたのであるか』

竜 アレックスが問うてくる。

楯無は、ふふ、と笑みを浮かべた。

「な・い・しよ」

『……』

「冗談よ、ちゃんと教えるってば。だからその物騒な物を閉まっ  
てよ」

無言で副砲を展開したアレックスを、楯無は慌てて止める。

アレックスは、慄然とした様子で副砲を収納すると、顎を軽く動か

し、話を促した。

楯無が行った事。

それは、自身のIS、グストーイ・トウマン・モスクヴェエの特殊能力を利用したものであった。

「この子の能力は、ナノマシンを用いた、水の操作。貴方が現れた時、咄嗟にこのナノマシンを水蒸気に乗せて散布したのよ」

グストーイ・トウマン・モスクヴェエの持つナノマシンは、水に溶け込んで自由に形状を変化させたり、ナノマシンを急激に発熱させることで、小規模な水蒸気爆発を引き起こす事を可能にしている。

女のISの初撃。

それを防いだ際に生じた衝撃波は、後者の方法によって相殺したものであった。

「ハイパーセンサーが、妙な周波数の信号を捉えたの。あの女と、周囲の家々から出ていた、ね。すぐに、爆破信号だと気が付いたけれど、どうにも出来なかつたわ、爆弾の数が多すぎたからね。だから、起爆装置自体をなんとかすることにしたのよ」

軽く言うが、実際の所は必死だった。

アレックスのネタに女が気を取られている間、水蒸気に含ませたナノマシンを女の下へ届かせるのには、非常に神経を消耗させた。

「……疲れてたのは、何もあの竜のネタに呆れてただけが理由じゃないのよ。」

『しかし、起爆装置が破壊されれば爆弾が作動すると』

「それは、信号が途絶えた時。だったら、爆破命令を送る為のスイッチ、一つだけを使えなくすれば良かったのよ。そうすれば、起爆装置の信号を保ったまま、装置を無力化できるしね」

『……なるほど。だが、その為の水は何処から？』

その問いに、楯無は、自分の顔を指差す。

そこには、微かに涙の流れた跡があった。

「昔から言うでしょ？ 女の最大の武器は、涙だって」

『……やる事が終わった、というのはそういうことであつたか。全



く、姑息な手を……』

「姑息結構。力押しじゃどうにもならない事もあるのよ」  
さて、と一言。

楯無は、簪へと視線を向けた。

「……どう？ 簪ちゃん。……お姉ちゃんは、カッコ良かった？」

その問いに、簪が返す答えは決まっていた。

「……うん。姉さんは、何時もカッコいいよ」

言うと、姉は優しい笑みを浮かべた。

「ありがとう、簪ちゃん」

思わず、こちらまで嬉しくなるような綺麗な笑顔だった。

「じゃあ、この後は貴方に任せるわ、アレックス」

その瞬間、姉のISが解除された。

姉は、ISスーツだけの格好となって、地面に落ちる。

「姉さん!？」

慌てて簪が駆け寄ると、姉はやはり飄々とした笑みを浮かべていた。

「正直、最初の閃光を受け止めた時に、エネルギーを殆ど持っていたからねー。ナノマシン操作も、ギリギリの所だったのよ？」

「姉さん……お疲れ様」

簪は、姉を抱きしめる。

すると、非常に珍しい事に、姉が慌てる姿を拝む事が出来た。

「ちょ、ちよつと、簪ちゃん？」

姉が身体をよじらせるが、簪はホールドを強めて逃がさない。  
すると、観念したのか、姉はこちらに身を預けてきた。

「……姉さん、後で、色々お話ししようね」

「……ええ」

しばし、姉妹が二人だけの世界に入る。

それを破ったのは、おいてけぼりにされた、正義の竜だった。

『……そろそろ、良いか。それに、吾輩なにもしていないような気がするのだが』  
心なしか、落ち込んだ様子。

大きい筈のアレックスが、やけに小さく見えて。

「そ、そんなこと、ないです」  
簪は否定を返す。

「貴方が来てくれなかったら、きっと私はずっと泣いたままでした。怖いのも、不安なものも、無くしてくれたのは、アレックスさんなんですよ？ だから、その。……有難う御座いました」

一瞬の沈黙。

アレックスは、問う。

『……吾輩は、少女の涙を止められたか？』

頷くと、アレックスはそうか、と言ったきり黙ってしまった。

その様子が、どこか誇らしげに見えて、簪は笑みを漏らした。

姉も、続けて言う。

「それに、貴方が時間を稼いでくれなかったら、きっと上手くいかなかったわ。あの女のペースを崩す事も、私一人では無理だっただろうし。だから、貴方は立派な助けだったのよ？ 私からもお礼を言わせてもらっわ、アレックス。……有難う」

『……』

「それに、ね」

『む？』

「さつき、まかせるって言ったでしょ？ まだ、貴方の出番は終わってないわ」

……え？ それって。

どういうこと、簪が姉に尋ねようとした時だった。

「来るわ」

姉の言葉は、端的に事実を表していた。

甲高い、風切り音。

それは、簪にも良く馴染みのある音。

……！  
音源は、一瞬の内に到達した。  
上空。

十メートル程の位置に浮かぶ、三つの影。  
インフィニティストラトスだ。

赤と黒の、華奢なIS。

「だっせーな、ホントにやられてやがる！ あんだけ自身満々で引き受けといて、この様かよ！」

白に緑のアクセントが加えられた、重装のIS。

「しょーがないよ。いつもあいつつたらこんな感じだし。いつそ、死んどけば良かったんじゃないかな」

灰色一色の、刺々しいフォルムのIS。

「だから、爆弾などと不確実な物は止めておけ、と言ったのに。それよりも、あれはなに。……竜？」

三者三様に、言いたい事を言っている。

そこには、仲間を労わる言葉は無い。

「……大したお仲間ですこと」

皮肉げに、姉が呟いた。

それが聞こえたのか、赤と黒のISの女がかなり立てる。

「あんなもんを仲間だなんて、一緒にするんじゃないやねえよ！ どうでもいいんだ、んなことは。肝心なのは、あんたに死んでもらう事なんだよ！」

赤と黒のISの女が、ライフルを展開する。

その銃口は、真っ直ぐにこちらへと向いている。

思わず、姉を庇うように強く抱きしめるが、自分の前に立ちほだかっただ物を見て、力を緩めた。

「アレックス、さん」

『なるほど、わかりやすい者共である。楯無、でよかったか。全員倒してしまってもかまわんのだな？』

姉は、にやりと獰猛な笑みを浮かべると、許可を下した。

「ええ、いいわ。やっちゃんささい」

『jud.！』

赤と黒のIS乗りは、顔を憤怒に歪ませると。

「なあにが、ジャツジメントだ？ 叩き潰してやるよ鉄屑が？」

言うなり、発砲。

周囲に、轟音が響きわたる。

戦車の全面装甲すらも貫く魔弾。

それを、アレックスは避けることなく受けた。

鈍い、金属音。

簪は悲鳴をあげそうになるが、姉の表情を見ると、それを押しこんだ。

何故なら姉は。

……笑ってる。

「……簪ちゃん。あいつ、予想以上の、とんでもない化物かもしれないわよ」

その言葉を証明するが如く、声が響く。

『……大したことは、無いのであるな』

アレックスは、見る。

目の前の赤と黒の下品な女が、驚愕に顔を固めているのを。

……愚かな。

相手を侮り、その結果隙を晒すとは。

三流以下。

それがアレックスが女に抱いた評価だった。

自分の一部を託した女が相手なら、今頃は胴と首が泣き別れになっているだろう。

今の女になら、視覚器官をオフにしても弾は当たる。

だが、アレックスはそれをしない。

……正義の味方は、不意打ちなどせん。  
故に、アレックスは言う。

『それでは、こちらから行こう』  
その言葉に、ようやく三人の女が反応。  
構えをとるが、自分から見れば隙だらけだ。

アレックスは、今、怒っていた。  
正義には正義の流儀があるように、悪にもそれなりの流儀があると、アレックスは思っている。

それは、変身中や、必殺技の準備中に攻撃を加えない事や、登場と退場は派手にする事だけではない。

……仲間を、大切にすることだ。  
少なくとも、アレックスの知る悪は、そういうものだ。  
悪とは、正義には決して勝つ事が出来ない物。

故に、その分仲間同士の結束を高め、正義へと挑んでくるのだ。  
だが、  
だが、こいつらは違う。

敗れた仲間を、無かった者のように扱うこいつらは、悪ですらない  
外道だ。

……容赦は、せん。  
アレックスは、力を行使する。

それは、自分自身に疑念を抱かせた証拠の三つ目だ。  
ここへ、駆け付ける為にも、アレックスはその力を行使していた。  
それは、必要に迫られて、仕方なくといったものであったが、今は  
違う。

自分の意志によって、自分の力として、それを用いる。  
『……見せてやろう。R×という名が、ただの飾りでない証拠を』  
それは、いつの間にか身に付いていた力。

この世界へ来て、始めて使えるようになった力だ。

『いくぞ？ 驚天動地・アレックスフィールド、展開！』  
刹那。

世界が変わる。

アレックスの、思うがままに。

・ 正義は戦いの場を選ばない

概念が、世界を染めた。

### 三章 自分らしさの自問自答（後書き）

いかがだったでしょうか。

スリーヒーリータイムは、次回に持ち越しになりました。

あ、やめて、物を投げないでください！

はい、申し訳ありませんでした。

本当は、もう少し続けるつもりだったのですが、PCを使える時間が短く、切りの良い所で切ろうかな、と。

さて、ここまで書いておいて今更なのですが、更識姉妹のキャラクターに自信がなかったりします。

特に、簪に関しては、最新刊の印象だけでは、登場回数少なさの為にあまりにもキャラクターが薄く、結果大幅な妄想を投入する事になりました。

簪ファンの皆さま、大変申し訳ありません。

なんだか、布仏姉妹が完全に空気だなーと。

では、次回の更新を楽しみにしてください。

また、感想、評価、疑問、修正点などありましたら、宜しくお願ひします。

さて、次回は地獄の戦闘描写回だー（A、C）ウボアー

追伸

一番最後の、“ ” 付けんの忘れてたので修正しました……。

追々伸

1月8日16時

指摘された誤字の修正をしました。



#### 四章 空の支配者（前書き）

それは君臨する。

誰より雄々しく、だれより速く、誰より高く  
そして、誰よりも強く

## 四章 空の支配者

アレックスの言葉と同時。

楯無は、世界の変質を感じた。

……！？

見渡す限りの光景には、何の変化も無い様に思える。

目の前には依然としてアレックスの姿があり、その向こうには三機のISも確認できた。

自分を抱きしめる妹の、体温も、匂いも先程までと同じものだ。

ISスーツを通して伝わる、尻の下のアスファルトの冷たさも、普段感じていたものに変わりはない。

ただ、変わったという自覚だけがある。

それに、楯無はある物を聞いた。声だ。

世界の変質を、感じたのとほぼ同時。

自分の中から響いてくる様な、聞き覚えのある声がか確かに聞こえたのだ。

それは、短い言葉を告げていた。

……正義は、戦いの場を選ばない……、だったかしら。

妹を見ると、彼女も自分と同じ様に戸惑った様子。

問う。

「簪ちゃん、今の……」

「声が……聞こえた様な……」

「……それは、こういう言葉？」

楯無は、先程聞こえた言葉を繰り返す。すると、驚きに顔を染めながらも、妹は確かに頷いた。

彼女も、同じ言葉を聞いている。しかも、恐らく同じタイミングで。楯無は、ふと背後に視線をやった。

虚が、起きているかどうかを確認する為だ。

もし、起きていたならば、今の現象を尋ねてみたい気持ちもあったが。

「…………え？」

そこに、自分の幼馴染にして、専属メイドでもある少女はいなかった。

その代わりに、何かがある。

影。

彼女が居た筈の場所には、薄青い陰りが存在していた。

容易く向こうを透かせる陰りは、虚と同じ大きさで、虚と同じ形をしている。

「アレックス！…………何をしたの！？」

不理解。

大事な人間に及んだ変化に不安が募り、つい楯無は声を荒げた。

そこで、気付く。

アレックスへと視線を戻す際、彼の向こうに見えた街の風景。

それは。

…………明かりが、全く灯っていない暗闇…………。

最初に感じた違和感は、それだったのだ。

殆ど暗さに変化が無かった為、気付くのが遅れたが、すると今度は、

“暗さに変化が無い”。その事実自体についても疑問が生まれた。

…………一体、どういう事？

こんな現象は、今までに見た事も聞いたことも無い。

楯無の知識は、ありとあらゆる分野の専門的な所まで及んでいたが、それをもつても今の状況は不可解だ。

答えは、アレックスの口から語られる。

『うむ。これは、吾輩が展開した物。概念空間、と呼ばれるものである』

……やはり、聞き覚えがないのであろうな。

楯無が、鸚鵡返しに言葉を呟くのを背後に聞き、アレックスはそう判断した。

自分達が所属していた様な団体に、関わっていない者なら当然だろう。

もつとも、ここが異世界であると思えば、その団体自体が存在しないだろうが。

見れば、眼前に浮かぶ三人の外道達も、戸惑っている様だ。

その表情は、情報収集に必死、といった感じの物。

背後の二人も合わせて、合計五人の視線が、自分に集まっている。

……吾輩、注目されているのであるな！

やおらテンションが上がる。

正義の味方とは、そういう物だ。そこに複雑な理由などない。

そして、自分の能力を説明するのも、正義の味方の醍醐味だ。

手の内を晒す事に、抵抗は感じない。

むしろ、能力を隠して勝つなど、それは悪のやることだ。

正義は、求められれば能力を明かし、そしてその上で勝利する。

もつとも、聞かれなかったなら知らん。それは聞かない方が悪い。

ともかく、説明だ。

視線を堂々と受け止め、アレックスは説明を開始する。

『まず、貴様らに教えておこう。異世界という物が存在する。吾輩は、そこから来た』

言葉に、赤と黒の女が何かを言おうとするが、隣に居た白と緑の女に止められる。

……そう、正義の談話は大人しく聞く物だ。

微妙に、白と緑の女の心証を良くする。自身の小螺子一つ分ほどだが。

『そして、異世界を分ける基準とは、その世界における物理法則…

…すなわち、概念の差である』

続ける。

『概念とは、全ての理由の究極。そして、その正体とは世界そのものを流れる可変一定周期の振動波、自弦振動と呼ばれる物である。つまり、異世界の差とは、その世界の自弦振動の振動数の差であると言える。まずそれを納得してもらおうか』  
それに対するの反論は無いようだ。

『そして、世界の中にある全ての物は、世界の自弦振動の他に、そのもの固有の自弦振動を持っている。それは、その世界の母体自弦振動と、個別の子体自弦振動の二つである』

「……それぞれ分母と、分子の様な関係かしら。母体自弦振動は、その世界に所属する証で、子体自弦振動は、そのものの個性。そういう事？」

ほう、と内心でアレックスは感嘆の意を得る。

……随分と聡いのだな。

理解が早いのは良い事だと、アレックスは思う。

『そういう事で、間違いは無いのである。分母側が違えば、同じ個性でも異世界の存在。分子が違えば、それは個性の違い。異世界とは、重なり合っている者で、異世界に移るにはその物の母体自弦振動を変える必要があるのである』

恐らく、自分自身の母体自弦振動も変わっているのだからと、アレックスは秘かに思う。

その自覚は無いが、今ここに居るのならそれが事実だ。それ以上は考へん。

『そして、概念空間とは、母体自弦振動を半分ほどずらして作った、その世界と二重に存在する空間である。母体振動数をずらされた物体は、二つの世界にまたがって存在する。……簪、試しに近くにある、石ころでも持ち上げてみるがいい』

「え、はい」

簪が言われたとおりに、近くにあった小石を持ち上げる。

すると、元々小石があった場所に、小石と同じ大きさ、同じ形の薄青い影があるのが分かった。

恐る恐る、簪は影に手を伸ばす。  
触れられない。

その事を知り、愕然としながらも、簪は小石をその影に重なるように置いた。

影は、小石と完全に重なり見えなくなる。

『また、概念空間には基本的に生物は存在しない。あまりにデータとしての量が多いからな。さらに、概念空間を構成する物は、自弦振動の一部を抽出した物である故、概念空間にあるものは皆一様に劣化している。電気や水道といった物も通っておらんし、物質は取り込まれた瞬間の物から変化しない。……もつとも、概念空間で動かしたり壊す事は出来るが、あまり褒められたことではない。先程一部と言ったが、何度も繰り返し抽出し、破壊すれば現実にあるそれらは、何らかの形で失われることになる。概念空間はそれゆえあまり長く保つ事も出来ん』  
一息。

『要は、自弦振動の一部を間借りして作った疑似異世界だ。だから現実世界と連結しており、作ることも戻す事も比較的簡単にできるのだな。……では、こちらでクイズでもしてみようか』  
あまり長々と説明するだけでは、飽きるだろう。  
そう思ったが故のアレックスの配慮だったのだが、あまり反応は芳しくない。

……近頃の女性は、ノリが悪いのだろうか。  
思えば、自分の仲間もそうであった。

あの女に至っては、こちらが必殺技の解説をするのを、長い、一言で切り捨てた。  
クイズを出そうとした時など、呆れ顔で、どうでもいいわ、と言ったのだ。

……アレックスボンバーの前に付ける言葉が何か、気にはならんだろうか。

一人だけ、付き合ってくれた少女がいたが、惜しくも不正解だった。

しばしの間過去に浸る。

それを、現実へと引き戻したのは、簪が放った叫びだった。

「危ない？」

何か、と思っただ次の瞬間、砲撃音が聞こえた。

刹那の間も無く、自分の体に衝撃が走る。

……撃たれたか。

幸い、ダメージとしては大したことが無いが、気分は一気に悪くなる。

見れば、灰色の女が肩部に展開した大型の砲から、煙が立ち上っている。

『貴様！ 人が話している時に攻撃するとは、どういっつ見だ！』

「……これも、効果無し。想像以上に硬い」

『あ、こら、無視するでない？』

「……大体、聞くべき事は聞いた。これ以上は不要」

灰色の女に、白と緑の女も同意の頷きを見せる。

「うん。少なくとも、この場で戦闘をするにおいて特に問題が無い事が分かったし。むしろ、人が居ないから戦闘を抑える必要が無い分、こつちに有利じゃない？」

赤と黒の女は、ライフルを構えて言う。

「つまりは、わざわざ戦いやすい所を用意してくれたってわけだ、ばっかじゃねーの!？」

そう言い終わるや否や。

三体のISが飛ぶ。

向かうは上空。

彼女たちの、戦闘領域だ。

「さあ、あがってこいよ！ もっとも、そんな身体でのこのこ上がってくれば、すぐに蜂の巣だけだよあつ！」

……愚か者共が……。

今度こそ完全に、アレックスは三人の女に対して強い失望を抱いた。最早、怒る気にすらなれない

何せ、彼女たちは致命的な誤りを、自ら犯したのだから。

……奴らのミスは、三つである。

一つは、概念空間という物の特性その最も重要な事を最後まで聞かず、戦闘を開始した事。

そもそも、概念という物の力を、全く理解していない事が、それだけで致命的なのだ。

一つは、とうとう、こちらに対する悔いを捨てられなかった事。

竜の前に、恐怖を抱かないのは、無知と合わされば無謀でしかない。

『聞きたい事がある』

「何かしら？」

『あれは、どの程度まで破壊しても良い物なのだ？』

「……お優しい事で。……茶化してるわけじゃないわよ。そうね、完全に壊したりしなければ、ISは操縦者を守るようにできているわ」

楯無の言葉に、アレックスは頷く。

そして、再度言う。

『……楯無。貴様が心配の対象としていた少女は、概念空間の外、現実に変わりなく存在している。吾輩がこの空間に取り込んだのは、貴様ら姉妹と、あの愚か者共のみだ』

言葉に対し、楯無が安堵の息を漏らす。

「……そう。なら、良いわ。それで、なんでわざわざ私たちまで取り込んだわけ？」

『貴様らの子体自弦振動を読み込んで、ここへ入れるようにしたからだが』

「なんでここでボケるのかしら……。方法じゃなくて、理由よ、理由」

『なんだ、そんな事か』



楯無は、そんな事すら分からないのだろうか。先程、自分自身が行っていた事なのに。

『簪、貴様なら分かるだろう？』

自信の問いに、簪は頷く。

「はい。……アレックスさん。今から、カッコいい所を見せてくれるんですよね？」

『その通りである？』

アレックスは喜の感情を込めた言葉を放った。

正義という物を、良く分かっている少女だ。

正義とは、ただ一人で戦って得られるものではない。

……仲間を守り、そして、己の正義を見せつける事で不安を吹き飛ばす！ 正義の味方とは、何かを守る自分の中とそれを見る人々の中に存在するのだから？

一人きりで戦うのならば、それはただの独善だ。

誰にも見られず、誰の胸の中にも残ることなく、ただ戦って果てていくような物を正義とは言わないのだから。

『ならばこそ、楯無よ。簪よ。吾輩の正義を見るがいい？』

アレックスは、鼻先を天上へ向ける。

次の瞬間。

アレックスは、飛んだ。

大気すらも置き去りにするような速度で、ただ真上へ、天上へと。竜が、駆け昇っていく。

「……すっ……」

簪の口から洩れたのは、そんなありきたりの台詞だった。

心臓の鼓動が、高まるのを感じる。

望んでいた、ヒーロー。

それが、目の前で、その雄姿を見せてくれるのだ。こんなに嬉しい

事は無い。

「……まったく、無茶するわ。私たちを吹き飛ばす気かしら」  
言葉とは裏腹に、姉はなんの影響も受けていないようだった。

「あれだけの加速……、なのに、衝撃も無い。……僅かな風すらも起こらないなんて、どういう理屈よ」

「理屈なんて、ないよ。でも、理由なら分かる」  
簪には、分かった。

思い返せば、最初にアレックスが現れた時も、同じ様に風を感じなかった。

何故なら。

「だって、正義の味方は、守る者を絶対に傷つけないんだから……！」

自分の言葉に、姉は一瞬あっけにとられた表情を見せるが。

「……そうね。そうなんでしょう、きつと」

見れば、アレックスが放つジェット光は、遙か上空にまで達していた。

竜の戦いが、始まるのだ。

大気が、ぶち抜かれていく。

アレックスは、白い霧を引きながら飛ぶ。

目標は、前方120メートル。

竜の速度では、一瞬にも満たないわずかな距離だ。

アレックスは、見た。

三人の愚か者が、揃って驚愕の表情でこちらを見ているのを。

……実は、驚くのが奴らの趣味なのだろうか。

心に湧いた、詮無い考えを一蹴。

既に、戦いは始まった。

ならば、ここから先は不意を突かれたとしても、それは油断してい

た方が悪いのだ。

『行くぞ』

言葉は、大気摩擦に砕かれて消えた。

あるのは、戦う意気と、正義のみ。

アレックスは、行った。

赤と黒のISを駆る女　ゲイルは、一瞬の内に迫ってくる敵に驚愕した。

……速えっ？

予想以上だ。

あの鈍重そうな見た目の、どこからそんな速度が出るのだろうか。だが。

……それでも、ISには及ばねえんだよ？

そう、ISとは、蒼穹の支配者だ。

現行の、あらゆる兵器を鉄屑同然とするとまで称された、その性能は伊達ではない。

どのような攻撃力も無効化する、最強の盾である。

どのような防護も貫く、最強の矛である。

矛盾などという言葉は、ISに当てはまらない。

ただ一言。最強。

それが、ISという存在であった。

ゲイルは、その事を良く理解していた。

「真っ直ぐ突っ込んでくるだけだなんて、馬鹿だなあ」

白と緑のIS乗り、マインは呑気にそう言った。

緊張感など、欠片もない。

まず、緊張する理由が無い。  
確かに、相手の装甲は硬いようだ。  
だが、あの程度の攻撃、重装型のISなら、同じ様に屁でもないだろう。  
竜の速度も、ハイパーセンサーに強化された五感には、あくびが出るほどの物だ。  
どうせ、自分たちには叶わない。  
無様な鉄屑に、竜がなり果てる姿を想像し、マインは残酷な笑みを浮かべた。

「油断すると、あいつの二の舞。……散開するぞ、」  
灰色のISを用いる、ブレードは、言葉の通り冷静に相手を見ていた。

三機……既にやられているサイクロプスを含めれば、四機。  
彼女は、その中における、司令塔の役割を受け持っていた。  
故に、他の二人のように状況を楽観視する事は無いが、かといって警戒をしているわけでもない。

あくまでも、無関心。  
見れば、あの竜の機動は、戦闘機のそれに近い物だ。  
ならば、扱いてもそれでいい。

一度散開してから背後を取り、最も装甲が手薄な、後部推進機に砲撃してやればいい。

「カウント0で散開しろ。3……2……1」

0。  
信頼感など皆無だが、それでも彼女たちはプロである。  
司令塔から出された命令を、忠実に守り、実行して見せる。  
結果、タイミングは完璧なものだった。

竜は、三機のISを捉えることなく、通り過ぎていく。

その背中を、こちらに無防備に晒したまま。

……終わりだ。

あっけない。

そう思いながら、口を開く。

「 撃て」

結論から言つて。

彼女達の攻撃は、竜を落とすには至らなかった。

竜が、耐えたのではない。

「……馬鹿、な。躲した、だと……!!」

ブレードは愕然とする。

こちらの放った攻撃。

それは、僅かにタイミングをずらした、時間差攻撃だ。

ゲイルがまずライフルを射撃し、次に自分が肩の大型力ノン、最後にマインが最も破壊力のあるレーザー砲で止めをさす。

本来なら、最後にサイクロプスの閃光砲が加わるのだが、実際はそれだとオーバーキル気味なのでこの形でも十分なのだ。

万が一、初撃が避けられたとしても、第二波、第三波は、回避後の硬直では避けられないだろうし、最悪マインのレーザー砲さえ当たれば、後は傷ついた敵をどう料理してもいい。

今まで、これを破ったIS乗りは居らず、ましてや鈍重そうな、あの竜。回避行動といえば、せいぜいがバレル・ロールや方向転換ぐらいの物だろう。

ゼロリアクト・ターン アフソリユート・ターン  
無反動旋回や特殊無反動旋回すら持たないような相手が、躲せるものではない筈だった。

だが、現実はどうだ。

……まるで、生き物のように、身をくねらせて……!!

必死に、逃れようと方向を無理に変えていれば、速度は落ち、全て

の攻撃を喰らっていただろう。

ロールして躲すにも、時間が足りない。どこかしらに攻撃をひっかけて、後は墜ちる運命だ。

竜は、一切速度を落とさず、またコースを変えることも無く、身をくねらせるだけで全てを回避して見せたのだ。

ブレードが勘違いしていたのは、アレックスが人の乗った機械だという認識だ。

実際には、アレックスは最早機竜という一つの生物であり、その機動はこの世界の物には、不可能な物さえ可能とする。

……異世界という言葉をも、軽んじていたか……！

「おいつ！ どういうことだよ、躲しやがったぞおいつ!？」

「そんな！ なんなんだよあの動き!」

焦った仲間の声が、チャンネルを通して聞こえてくる。

「落ち着け！ 一度躲されただけだ！ 二度目を……!」

再度、指示を出そうとして、気付く。

……まさか、そんな。

竜の速度が上がっている。

彼女達の、致命的なミス。その最後の一つ。

それは、空を支配するものが、自分たちの他にもいるという事を知らなかった事。

機竜。

それは、概念戦争において、全世界の空を支配し、友とした最強の生物であった。

……まだ、加速は十分ではない……？

アレックスは、己の欠点を知っている。  
それは。

……重量故、加速の乗りが悪い事……？  
ましてや、この狭い空では尚更だ。  
概念空間の広さは、限られている。

自分の力では、どうやらそこまで大規模な概念空間を作れないよう  
だ。

そう。概念空間。

これを、展開できる事に気が付いたのは、簷の下へ向かう途中の事  
だった。

呼び声を聞いて、飛び出した後の事だ。

……速度が、足りない。

必ず駆け付ける。

その思いは断固としてあった。

しかし、あまりにも距離が離れすぎている。

ここが、違う世界であることは気付いていた。

飛んでいる内に、どうやら、元居た世界と殆ど同じ地理の世界であ  
る事がわかった。

逆算して、自分が居たのが元の世界におけるサンフランシスコ沖2  
0キロメートル、呼び声が聞こえたのが東アジアの辺りであること  
も検討をつけた。

だが、正確な位置がわからず、さらには距離も離れていた。  
間に合うだろうか。

そう思った時、声を聞いた。

・ 正義は届く

……概念条文！？

思った時には、自分は概念空間を展開していた。  
自分には、自ら概念空間を展開するような力は無い。  
どうということだ、と思うよりも早く、それは来た。

……自分と、呼び声の座標！

脳裏に浮かんだ、という表現を使うのだろうか、とにかく、それが分かった。

そして、そこへ駆け付けたいと思った瞬間。

自分の身体が、本来出せる限界を超えて、その座標へと向かったのだ。

そして、結果として間に合った。

正義の味方らしく、そこへ駆け付ける事が出来た。

だが、とアレックスは思う。

……この力は、一体何であろうか。

概念ではある筈だ。

現に、自分は概念空間を展開し、物理法則を超えた力を使っているのだから。

実は、今もそうだ。

正義は戦う場を選ばないという概念。

それは、この場において正義と、正義に刃向かう者を、無条件で照らしだしていた。

いついかなる場所においても、正義は戦いを行えなければならない。それを、体現するかのような概念。

楯無が、周囲の変化に気付いていないようであったのは、恐らくこの概念によって自分と敵がはっきりと見えていたからであろう。

……わからぬな。

そう、全く分からない。

しかし、アレックスにとって、それはどうでもいいことだ。

自分は、今戦えている。

正義を示す事が出来ている。

他に、必要な物があるだろうか。

……否？

そして、見る。

旋回をした先、前方数百メートル先にある、三機の影。

先程、こちらに攻撃を仕掛けた敵の姿。



いや、あれは攻撃と呼ぶにはあまりにお粗末なものだった。

かつて、自分の身体二つ分しかないような空間を、戦いながら飛んだ事のある自分には、それは易しいの一言に尽きた。  
何故かは分かる。

……やつらは、必死でない。

思い出すのは、光の翼と、長槍を携えた少女。

彼女は、この身に対してあまりにも脆弱な存在であったが、しかし、必死であった。

そして、その必死を通した結果、自分と引き分けて見せた。

あの敵には、それが無い。

そんな相手が。

『吾輩の正義を崩す事など、不可能である??』  
吠える。

天をも貫くような、竜の咆哮。

それによって生まれた感情を糧に、アレックスは加速していく。

夜の大气が、装甲を乱暴に掻き抜いていく。

それすらも、快いと、アレックスは思う。

身が絞られるような加圧の感触は、踏み込みの喜びに等しいのだ。

一瞬の、身を押しとどめるような感覚。

それら、抵抗となる物を超えれば、来るのは絶対的な加速だ。

来た。

……ああ。

飛ぶ。

概念空間によって区切られた、不自由の空を、自分は飛ぶ。

飛ぶ。

飛んで行く。

飛んで、迫った。

目の前で、ようやく必死になり始めた敵へ。

遅い。

何時しか、音すら感じない。

あるのは、速度。

それと正義。

それだけでいい。

腹部、そこに収納されている副砲。

展開する。

狙いをつけた。

灰色の機体。

確か、ある程度以上のダメージを加え続ければ、それは碎ける。

楯無がやっていたように。

この高さから落ちて、どうなるか。

それ以前に、自身の最大の火力を浴びせれば、どうなるか。

知った事ではない。

だが、おそらくそうなれば簷が泣く。

優しい子だ。

きつと、正義を好んではいても、正義が悪を殺す事を好んでいるわ

けではないだろう。

ならば、どうするか。

決まっていた。

『 ちよつと手加減版・アレックスビーム？ 』

細い、赤色の光が、空を割った。

視界が赤に染まる。

撃たれた、と思う暇もない。

着弾した部分を起点として、装甲がはじけ飛んだ。

一瞬で、丸裸にされる。

シールドエネルギーが削られた事で、操縦者を保護する為に、IS

は全ての装甲を一旦粒子化する。

そうなれば、向かう先は地面だ。

浮遊感。

それは、数秒で終わる。

ISが再起動し、地表までの高さを計算。

背部の推進機と、姿勢制御装置のみを展開、機動。

ブレードは、薄れ行く意識の中思う。

……完敗、か。

灰色のISは、気を失った操縦者を、優しく抱きしめながら、地上へと下りて行った。

一撃で、ブレードがやられた。

その事実は、マインに危機感を持たせるには、十分なものだった。

……化物……！

舐めていた。

なんだ、あれは。桁が違うではないか。

今まで、ISこそが空の支配者であると信じてきた。

その信仰が揺らぐのを感じ。

「……ふ、ざけるなあっ！」

否定の叫びを上げる。

信じられない。信じたくない。

もし、受け入れてしまえば、自分の存在そのものの否定に他ならない。

……ずっと、これだけだったんだ！

自分を、見捨てたのは世界の方だ。

だからこそ、自分も世界を見捨ててやろうと決めた。

その為に、ISに乗った。

どんな辛い訓練にも、任務にも耐えてきた。

そうして、歩いて、歩いて、歩き疲れて。

また、見捨てられて。

気が付けば、こんなところまで来ていた。

「……もう、戻れないんだよっ！」

言いながら、マインは武装を展開した。

レーザー砲ではない。

自分のISは、基本的には防衛重視の鈍重な機体だ。

だからこそ、バズスロットは高性能のレーザー砲の他、相手を寄せ付けない為の物で埋まっている。

そんな武装の中、全く違った用途の武装がある。

最も多く、バズスロットを使用するそれを、マインは使用する。

奥の手。

ゲイルや、ブレードにすら見せた事が無い、秘密兵器だ。

展開する。

白と緑のISの周りに、出現するのは、二つの巨大な黒い半球だ。

「E・Gマイン？」

腕を覆う装甲。

その先端部、指に当たる部分から、ワイヤーが飛び出す。

それが、半球と接続された瞬間、半球の表面から、高速回転する鋭い棘が無数に飛び出した。

手首を捻れば、半球はISを収納して、一つの弾となる。

「ううううううううううううううううあああああああつ??」

雄たけび。

マインは、一つの弾丸として飛び出した。

既に、数十メートル程の位置に、竜は居る。

……砕けるおおおつ?

核シェルターすらミンチにする、E・Gマインだ。これならば。そう思った時、竜が言ったのが聞こえた。

『貴様こそ、ただ真っ直ぐ突っ込んできているではないか』

「ッ? 黙れえええええつ??」

最早、相打ちでも構わない。

そこまで熱くなった思考は、しかし次の竜の言葉で凍りつく。

『しかし、貴様……泣いているのか』

……え？

疑問を抱いた瞬間。

E・Gマインが、破碎された。

破片に混じるのは、赤い光。

先程の、レーザー砲の残滓だ。

……あ、……。

いや。

それだけでは無かった。

透明な、滴。

それが、自分の目から出ているのだと気付いた時には、竜は通り過ぎていた。

何もすることなく。

『……無防備になって泣く者を、撃つ事は出来ん。すでに勝負がついた以上はな』

言われたとおりだった。

最早、自分に抗う術は無い。

その事を自覚し、マインは目を閉じた。

ISは、搭乗者の意を汲んで、地表へと向かっていく。

残るは、自分一人。

そうなつても、ゲイルは冷静だった。

……使えねえ。

最初から、彼女の中に他人という文字は無い。

あるのは、自分のみ。

そんな彼女にとって、他人は全て自分の下にあるもので。

……まあ、最初から期待もしてなかったけどよ。  
結果。

仲間の撃墜は、彼女の心を大きく揺らす事は無かった。  
彼女の心を揺らすのは、たった一つ。

「……この、糞トカゲがあ？」  
悠々と空を駆ける竜。

それが憎たらしくて仕方がない。  
憎たらしいならば、潰してしまえ。

「ぶっ潰してやるよおおっ？」

ゲイルは、その名の示すとおりに駆けた。  
イグニッション・ブースト。

IS乗りにとって、一つの壁であり、また、最大の武器でもある技法だ。

彼女はそれを、接近に用いた。

竜は、丁度、こちらに左の腹を向けている。

……殺れる！

瞬時に、武装を展開。

現れるのは、全長三メートル超過の、巨大なガトリング砲だ。  
自分の名前と等しいそれを、ゲイルは構え。

轟音。

毎秒二千発の勢いをもって、弾丸が竜を喰いにかかる。

竜は、さらに加速して逃れようとするが。

……逃げてんじゃねえっ！

特殊無反動旋回。

ほぼ、直角の旋回。

無反動、と言っても、当然身体には大量のGがかかる。  
だが、それを超えればPICによって負荷は消え。

すぐ横には、無防備な竜の腹があった。

「殺ったあ！」

叫びと共に、引き金を引こうとして。

『爆散重射・アレックスミサイル！』

突然、竜が背中をこちらへ向けた。

そこには、幾つもの線が走っており、それは一瞬で開いた。  
現れたのは、無数のミサイルの先端部。

「ッ？」

喉が干上がる。

だが、相手は待つてはくれない。

来た。

六十四発の小型ミサイルが、ゲイルを襲う。

「嘗めるなああああああああああああつ??」  
逃げない。

ゲイルは、引き金を引いた。

ミサイルを、がむしゃらに打ち抜いていく。

「っが……!!」

その内、何発かは信管を作動させ、ゲイルの間近で爆風と破片を  
まき散らす。

連続して襲う衝撃と、鼓膜をつんざくような爆発音。

ISの装甲が削られ、シールドエネルギーが激減していく。

……くあつ……!!

だが、まだ飛べる。

まだ、やれるのだ。

ゲイルは、ミサイルの雨の中を潜り抜けていく。

そうして、憎き竜へと追いつがる。

既に、音速はとっくに超えている。

曇天の夜空に、白い二本の筋が走った。

ヴェイパートレイルだ。

それは、まるで空に割線を引いて行く様で。

そして、不意に片方が途切れた。

ゲイルのISが、エネルギーを切らしたのだ。

「……くしょう」

だんだんと、高度を下げっていく視界。

そこに映るのは、遙か先に行く、竜の後ろ姿。

まるで、それは、ここまで来いと誘っているようで。  
ゲイルは、顔を歪ませると、天に叫びを放った。  
「ちつくしよおおおおおおおおおおお？？」

こうして、概念空間での戦闘は、終わりを告げた。  
アレックスの、勝利という形で。

「アレックスさん！」

地上へ帰還したアレックスを待っていたのは、簪の声だった。  
見れば、そこには満面の笑みで手を振る簪の姿。  
アレックスの心を、誇りと喜びが満たしていく。  
あの笑顔は、自分が作ったものだ。  
涙を吹き飛ばし、その代わりに与えた物だ。

…… 見ているか。我が宿敵よ。吾輩は、己の正義を通したぞ。  
青と白の機竜。

それに届けばいいと、アレックスは思った。

そして、もう一人。

一番、大切な、女の事。

…… 吾輩は、吾輩の正義は、死んではないぞ。なあ、竜美よ……！  
届け。

世界を超えて、届け、思いよ。

自分は、ここに居ると。

「…… なんだか、嬉しそうにしてるけど、何時になったらここは出れるの？」

背後の声に、振り向いてみれば、そこには三人の気絶した女をロープで縛っている楯無がいた。



『……もうすぐ、解けるのである』  
言葉通りとなった。

概念空間が、天頂から解けていく。  
やがて、それは地上にまで及び、周囲には元の静寂が戻った。  
街の明かりを見て、楯無は安堵したようにため息をつく。

「……ふう、終わった、か」

その顔には、確かな笑み。

アレックスは、それを見て思う。

……吾輩の、役目は終わったな。  
そう。

悪を倒し、弱者を救ったヒーローは、人知れず去っていくものである。

アレックスも、その通りにしようとして。

『……そこをどくのである、簪』

目の前に立ちふさがる、簪に声をかけた。

「どこへ、行くんですか」

『去るのだ。ヒーローとはそういうものである』

そう言つと、簪は首を振る。

「でも、まだなにもお礼をしてないし、それに……」

『吾輩は、礼が欲しくてやったわけではない』

「でも、でも……」

今にも、簪は泣きだしそうだ。

……困った事になった。

どうにも、最後の最後で格好がつかない。

思わず、楯無を見ると目を逸らされた。

……貴様……！

しかし、どうしようもない。

ヒーローは、涙を止める物だが、別れを惜しむ涙は例外だ。

最終回ともなれば、それはヒーローを送り出すものなのだから。  
だが。

「泣いてたら、止めてくれるんじゃないんですか……?」  
『ッ!』

その台詞が、かつての自分の最後とリフレインする。  
あの時、自分は証を託して、行った。

だが、今はどうすべきか。

……二度ネタは、良くないのである!

アレックスはなにか言おうとして。

……む?

ぐらりと。

身体が傾いた。

「アレックスさん!？」

妹の悲鳴にも似た声を聞き、楯無は振り返った。  
見れば、アレックスがその姿を薄れさせていく。  
まるで、存在そのものが消えていく様に。

「ちよっと! どうしたのよ!？」

アレックスは応えない。

そのまま、急激に竜は姿を薄れさせていき。

何かが、倒れる音がした。

思わず、そのおとの発生源を見て。

……え。

「……んむ……」

やけに、寒い。

自分は布団にくるまっていたはずなのに。

全身まっ黄色の謎物体。

その正体、布仏本音は、疑問を抱きながらも、目を開けた。寝ぼけ眼をこすりながら、見れば。

「…………あれ、空が見えるよ」  
夜空だ。

更識家に、天窓などあっただろうか。

そう思いながら、視線を横へ向けると。

姉が倒れていた。

思考に空白が生まれる。

さらに見れば、家が吹き飛んでいる。

……。

道路には、主人と、その姉が立っていて。

その前方。

何故か、金髪の青年が、全裸でうつぶせに倒れていた。

「…………どんな、状況？」

珍しく、語尾が伸びなかった。

#### 四章 空の支配者（後書き）

いかがだったでしょうか

つ・か・れ・た

もー駄目だ。首痛い。

過去最多量の文章です。

しかし、実際の所ほとんどは説明会でした。  
で、問題の戦闘描写。

すっごく、自信がありません（ ^ ^ ）

いやいやもう、川上稔は化物かと。

もう足向けて寝れません。

他の作者さん達が、すごすぎる。

はい。愚痴を垂れ流してしまい、大変申し訳ありませんでした。

楽しんで頂けたのなら、幸いです。

今回は、この巻における最終章となります。

これまでは、所謂一つの、プロローグですね。

これから、原作へと向かい、大きく話を動かしていきたいです。

長くなりましたが、この辺で。

有難う御座いました。

**最終章 意志達の向かう所（前書き）**

過去も今も未来も

向かうべき所は一つ

空は、広く澄み渡っている

## 最終章 意志達の向かう所

楯無は、自室に籠り、作業をしていた。

手には、万年筆。

出雲社製の、『真つ黒ツス！ フロンティア』だ。奇妙な名称の割りには、インクの乗りが滑らかで使いやすく、かなり前から愛用していた。

欠点と言えば、一度グリップの部分が回転することに気付き、興味本意で弄ってみた所。

……突然、妙な音声と共に万年筆が人形に変形して、インクを噴射したのよね……。

お陰で、あの時は部屋の中がえらいことになった。

出雲社にクレームを入れると、詫びの手紙が添えられた、詰め替え用インクが大量に贈られてきた。

（書き物が）多い日も安心！ とは、ジョークのつもりだろうか。勿体ないので使っているが。

…… 思い出したら、鬱になってきたわー。

楯無は、軽く頭を振って思考をアジャスト。改めて、目の前の机を注視する。

シックな出で立ちの、木製机の表面。

そこは、白に埋め尽くされていた。書類だ。

内容は主に、周辺住民への慰謝料や、戦闘によって破壊された建造物の修理費用の明細だ。

周辺住民に対しては、強盗集団が更織家を狙って入り込み、その過程で邪魔となる人々を眠らせたのだ、と説明してある。強盗は、未だ捕まっていないことにしてある。

正直、苦しい説明だが、皆、更織家への信頼からか信じていたようだ。

「普段から色々と、気を使ってきたからね……」

言葉こそ軽いが、内心、楯無は僅かな心の痛みを覚えた。

結局は、都合の良いように信じさせ、危害が加わっても善意に甘えて誤魔化す。

……あの竜が聞けば、何て言うかしら。

ともあれ、仕事だ。

その他、楯無が当主として書き込む必要のある書類や、極希に混じっている悩み相談の返信用紙がある。

中でも、枚数が多いのは、ISの私的使用に関する始末書だ。

強盗がISを弄り、その為ISが誤作動を起こし、家を吹き飛ばした。

それが公への説明で、強盗が捕まらなかったのも、その処理に手をとられたからだ、という辻褃合わせにもなった。

しかし、管理不行き届きとして、一時は専用ISを取り上げられるところだった。政府からの根回しで、それは避けられたようだが。

「ふう……」

楯無は、ため息を吐いた。

これらの書類は、この数日間殆ど減ることが無かった。

書き上げる側から、虚が新しい書類を運んでくる。流石の更織家主も、これには参っていた。

「……んっ……く、ふう」

伸びをしながら、ふと思う。

……もう、あれから、一週間も経ったのね。

自宅は、すぐに修復が済み、寝床に困るということはなかったが、多くのものが失われたため、元通りの生活になるには時間がかかった。

やることは、大量にあった。

例えば、例の四人に対する尋問だ。

それにより、本来ならば、今回の襲撃成功の暁には、更織家壊滅の混乱をついた政府自体への直接攻撃が行われるはずだった事が明らか

かになった。

更識家とは、政府とは独立した、一種の諜報機関という性格を持っている。

各所に、太く密接な独自のパイプを持っており、それは政府要人の幾人かとも繋がっている。

依頼とあれば、様々な所から極秘任務を預かり、実行する。その中には、政府からの依頼も含まれており、その為に更識家は、本来ならば“存在している事を知る事”すら危険な数々の情報にも触れている。

こんな、明らかに無茶苦茶な組織は、普通ならすぐに取り潰されてもおかしくは無いのだが。

……先々代の“楯無”が、それ以上に早く、大量の極秘情報を手に入れて、政府自体と交渉をしたのよね。

現在更識家は、数々の危険な情報を抱えており、更識家が今壊滅する事は、それらの情報が拡散する事を意味している。それが嫌ならば更識家にはちよっかいを出すな。代わりに優先して政府の任務を行ってやるし、これらの情報を漏らす事は無いと約束する、と。

殆ど、ヤクザの様なやり口だが、結果として更識家は安定した土台と後ろ盾を手に入れたのだ。

今では、政府と更識家は、完全な持ちつ持たれつ　それどころか、一蓮托生の状況にある。

よって、今回の襲撃は、政府にとっても非常に危険な物であり、連絡を入れた瞬間から、嚴重な警戒態勢が敷かれたのだ。現在の所、なにか異常が起きたという知らせは、無い。

ちなみに、ISの私的使用に対する根回しも、そんな理由からだっ

た。  
もつとも、今回の事で、政府からは更識家に対する不安が噴出した  
ようだが。

……今更、関係を切ることはできないし、そもそも情報は守られた  
のだからこれ以上を突つつくのは危険だと判断されたみたいね。



弱腰なのか、豪胆なのか分からないが、ともかく更識家にはお咎め無しという結果になった。

楯無的には、知り合いでもある現在の首相の顔を思い浮かべ、恐らく後者なのだろうとも思ったが。

次に、気絶していた人員達について。

何れも軽い怪我で済んでいたが、念のために検査入院をさせた。

彼らは、既に通常通りの業務を行っており、身体には特に異常は無かったとのことだ。

だが、簪の警護に就いていた者達。

彼らに関しては、二度と更識家の敷居を踏むことは、無かった。

皆、何れもすぐ近くの路地裏に、纏めて置き去りにされていた。

それを行った人物は、残念ながら捕えることは出来なかった。

もしも、見つけたならば、生まれてきた事を後悔させてやる。楯無はそう決意し、心に黒い炎を燃やしたが。

……簪ちゃん。

現在の楯無の胸には炎は存在していない。

代わりにあるのは、悲しみだ。

あの時の事を、これから先、決して忘れることは無いだろう。

妹に、その事実を伝えようとは思わなかった。彼女が知るには、この世界は醜過ぎる。

だが。

……簪ちゃんは、自分からそれを見せてほしいと言ってきた。

反対は、した。そして、見るなとも言った。

しかし、彼女は強い視線で言ったのだ。

……自分を守ってくれていた人の事を、知らないまま安穩と生きていきたくはない……って。

結局、頑として譲らない妹に、こちらが折れた形だ。

今でも、その選択は後悔している。

一人目を見せた瞬間の、妹の表情。

一言では言い表せない様な、凍りついた表情。

止めるか。

そう聞くと、彼女は首を振り、彼ら一人一人の顔を覆っていたシーツを捲っていった。

そして、全員の顔をしっかりと確認した後、嗚咽混じりの、謝罪と感謝の言葉を述べたのだ。

楯無は、知っている。

その日の夜、妹が夜中に悲鳴を上げて飛び起きたのを。

その後、トイレに駆け込んで、しばらくの間出てこなかった事を。

それからしばらくの間は、動けない自分の代わりに本音が傍に就いていた。

今では、表面上は平気そうにしているが、時折、何かを堪えるように目を瞑る時がある。

……頑張って……。

彼女が、その道を選んだのだ。

それを、自分が干渉することは、彼女と彼等への侮辱に他ならない。今はただ、見守る時期だ。

そして、その妹は、今はある部屋にいる筈だ。

この家の、最深部にある一室。そこには、一人の男が眠っている。……アレックス……。

一週間。

人間の姿になった彼は、未だに目を覚まさない。

検査をしてみても、体自体は至って健康体であった。

普通の人間と同じく、体温も、脈拍も、生理反応すら備えている。

機械の身体を持つ竜かと思えば、人と同じ姿に変わる。

本当に、彼は何者なのだろうか。

……そんな事は、考えるだけ無駄かしらね。

異世界から来たと言っていた。

恐らく、それが真実であると楯無は判断する以上、彼にこの世界の常識を押し付けるのは愚行でしかない。

だから、楯無は彼に疑念を抱く代わりに。

……さつさと起きなさいよ。ヒーローが、心配かけてどうするのよ……。  
そんな弱気も、すぐに打ち捨てる。  
自分の仕事は、まだこれからののだ。  
数分後、一通り書類整理を済ませると、楯無は机を離れ、部屋を歩く。

数歩で部屋の出口にたどり着き、襖を開けた。  
瞬間、外の空気が流れ込んでくる。

庭に面した楯無の部屋は、この家の中心部にあった。

更織家は、広大な中庭を囲むように、長方形の形をしている。

純日本風なこの造りを、楯無は気に入っていた。

……たまに、内装を勝手に変える人員もいるけど。

この前、廊下の壁一面が、人員全員分の手形で埋まっていた時は、柄にもなく狼狽した。その中には、押した覚えのない自分や妹のものまであり、即刻首謀者には、壁を塗り直させた。

……家を、恐怖アートのにしないでくれるかしら。

楯無は、目の前に広がる庭を見た。

やはり、そこも日本風の造り。

時刻は、正午に差し掛かろうとするところ。

夏の日差しを受けて、庭の池が光を反射している。

今日は、風のお陰か、そこまで暑くは無い。

空は蒼く、西の方には大きな入道雲が迫ってきている。

……一雨来そうね。

楯無は、そう思い、今のうちに残りの仕事を済ませてしまっことにした。

視線を回す。

その先は、家の中心からは離れた所にある、離だ。

そこに、これから交渉を行うべき者達がいる。

……今は、何をしているかしらね。

八畳ほどの、畳敷きの部屋。

隅には、布団が積み重なって置いてある。

一応、風呂とトイレもあり、人が暮らすには最低限の物が揃っていた。

離の中には、四人分の人影があった。

それらは、全員が若い女だ。

彼女達は、それぞれ思い思いの行動をとっている。

壁に寄りかかり、腕を組んでいるのはブレード。日本風の顔立ちに、短い黒髪が特徴だ。

室内を、苛立たしげに歩き回っている高身長の方は、ゲイル。短く揃えた金髪の下には、整っているが眉根を詰めた顔がある。

部屋の隅で蹲っている小柄な姿は、マインだ。その表情は、色素の薄い灰色の髪に隠れて見えない。

そして、最後の一人。ウェーブの掛かった茶の長髪を持つ、サイクロプスは、部屋の中央に備えられたちゃぶ台の前に正座している。

手元には、湯気を立てる湯飲み。

中身は、部屋にあったポットで淹れた緑茶だ。

……いい茶葉使ってるのね。

口に含んだ、熱い緑の液体は、芳醇な苦味と甘味を舌に伝えてくる。ほっ、と一息。

そこで、思う。

……なんで、こんなことになってるのかしら。気が付いたら、仲間達が横で寝ていた。

そこで、彼女らの敗北を悟り、自らのこれからを想像して、歯噛みした。

しかし、蓋を開けてみれば、尋問は穏やかに行われ、その後なんら危害を加えられることもない。

……もっとも、ISは取り上げられたけど。

当然だろう。

むしろ、それだけで、拘束すらしないのだから、随分と甘い処置だ。いっそ、逃亡してやるうか。そう思ったが。

……ブレードは、我関せずといった風体。ゲイルはずっと苛々しっぱなしで、まともに話もできない。マインなんか、すっかり落ち込んだんじやって、どうしたのかしら。

あの後、なにがあったのかは知らないが余程手酷い負けかたをしたのだろう。恐らくは、あの竜に。

……まあ、別にいいけど。

サイクロプス自身、そこまで脱走は本気ではない。

ISなくして、それは自殺行為であるし、何より、自分達の組織は失敗して逃げ帰ってきた者をわざわざ置いておきはしないだろう。今回のことも、下手をすれば捨て駒扱いだったのだ。

だからこそ、さほど抵抗なく情報も教えてやった。

……もっとも、これからどうなるかなんてわからないし。

そう思い、また茶を一口。

うん。美味しい。

「って、てめえは何呑気に茶あ飲んでやがるんだ！」

突然、ゲイルが叫んだ。

サイクロプスは、顔を顰めて、返す。

「なによ、良いじゃない別に。私達負けたんだし、なにもされないうちにのんびりしておきたいのよ」

「それだよ、その考えが気に食わねえ！ やり返そうとは思わねえのか！ もう一週間だぞ！？」

ゲイルの言葉に、サイクロプスは嫌味を返そうとした。

しかし、それは果たされない。

ブレードが、口を挟んだのだ。

「やり返すって、どうするの。ISも無し、監視もされてる。おまけに、若干一名、戦闘不能」

一名、のところで、ブレードはちらりとマインを見た。

マインは微動だにしない。

「ぐう」

一方ゲイルは、ぐうの音を出すのが、精一杯だったようだ。そのまま、黙りこみ、しかし歩き回るのは止めない。

……本当、どうしたものかしらね。

考えは浮かばない。

ゲイルの言うように、焦る気持ちは分かるのだ。

だが、実感が湧かないのだ、今の現状の全てに。

元々、サイクロプスは特に複雑な事情をもって、前の組織に入ったわけではない。

家族もごく普通の中流家庭で、友人も居たし、大学も出て会社勤めをしていた。

そこまで裕福でも無かったが、それなりに満ち足りた生活であった。ただ、刺激という物は皆無。

だからだろうか。友人と興味本位で受けに行ったIS適性検査で、一人だけB-という結果が出た時。

そして、現在の“職場”からのスカウトがかかった時。

躊躇うことなく、それを受け、戦いの中へ踏み込んでいった。

組織に居た時、自分はいくまで末端の兵士の一人であった。

そこには、崇高な信念も、激しい欲求も無い。忌避感や、罪悪感すらも無い。

ただただ、流されてきただけの自分には、それを持つ事すら、不自然に思えたから。

命のやり取りだって、ISという最強をもってすれば、こちらに一方的に有利な物。

その気分は、悪くは無かったし、愉快でもあった。

だが、何時しか元の仕事と同じ様に、ただ平坦に過ごすだけになっていた。

それだけに、一週間前の任務。

自分の予想外が立て続けに起こり、つい感情が高ぶってしまったの

だ。

……まあ、その結果がこれだけど。

自嘲。

そう、とうとう年貢の納め時が来たという事だろう。  
だったら、それでもいい。

自分の事なのに、どこか人ごとだ。

せめて、ここにいる者たちが、友と言える存在であったなら話は違  
ったかもしれないが。

……まともに話も出来ないし。

ゲイルは何時も不機嫌そうな表情で、近づけば睨みつけてくる。

マインは、明らかに負のオーラを放ち、時折意味も無くにやりとす  
るので気持ち悪い。

一番まともそうなブレードですら、口を開くと訳の分からない軍事  
的な事しか言わず、話が合わない。

……あら？ もしかして私って無個性？

そもそも、どうして自分はこの三人と共に居るのか。

偶然、上からの命令でチームを組んで、しばらく一緒にやっていた  
だけだ。

それだけの繋がりには、一体何を求めると。

「……まあ、もうお終いでしょうけど」

そう、一人ごちて湯呑みに口を付けようとした時だった。

鍵の開く音。

「……？」

鈍い、錆びついた金属音と共に、扉が開かれ、見慣れた顔が現れる。

「こんにちわー。調子はどうかしら？」

それは、楯無であった。

手には、五人分の昼食が乗った、盆を持っている。

香辛料に、肉や野菜が溶け込んだ匂い。

湯気を立てるそれは、カレーライスだ。

肩に掛けた透明な容器の中には、おそらく水が入っているのだろう。

「……最悪よ。今日も、貴方が来たの？」

「ええ。悪いかしら？」

ここに閉じ込められて一週間。

衣食は、しっかりと提供されたが、何故か、昼飯の時間になるとこの少女が必ずやってくるのだ。

自分も含めた人数分の料理を持つて。

危険だとは思わないのか、一度聞いてみたが。

……私に何かあれば、貴方達は生存権を自ら放棄したも同じなのよ、とはね。

豪胆というかなんというか。

ともかく、最初の頃は警戒していたが、今ではそんなことすらも馬鹿らしくなり普通に食事をしている。

「……別に。頂くわ」

楯無は、ちゃぶ台の上に人数分の用意をしていく。

グラスに水が入られた所で、ちゃぶ台には全員が着いていた。

……最初から居た私はともかく、ブレードは来るのが早すぎないかしら。

扉が開いた瞬間には、既に自分の隣に居た。どんな女だ。

続いて、ゲイルが洩々と。

最後に、まるで人形のような動きでマインがやってくるのが恒例だ。

「じゃあ、頂きましょうか」

楯無は、手を合わせていただきます、というとかレーを食べ始めた。

自分とブレードがそれに倣い、ゲイルとマインは無言だ。

褐色のルウがかかったライスを、スプーンで一口。

口の中に、何とも言えない風味と、深いコクが広がる。

続いてやってくるのは辛さだが、こちらはほんの少し。カレーの風味自体を楽しむ作りだ。

そんなカレーは。

……美味しいのよねえ、複雑な事に。

皆も、同じ意見なのか、ブレードはひたすら貪り食っているし、ゲ



イルも僅かながら表情の険を緩めている。マインは、相変わらずの死んだ目をしているが。

「どうかしら？」

「……美味しいわ。貴方が作ったの？」

「ええ、お姉さん張り切ったわよー」

そうなのだ。

これらの食事は、どうやら楯無が作っているらしい。

サイクロプスは、大きめに切つてあるジャガイモを、スプーンで半分に分けると口に運ぶ。

硬すぎず、柔らかすぎない。しっかりと触感を残しながら、噛めばすぐに溶けていく。

……すごく美味しいのよねえ、本当に複雑な事に。

カレーは偉大である。

ふと、視線を向けると、ゲイルが嫌そうな顔をしている。

見れば、スプーンにはオレンジ色。人参だ。

「……嫌いなのか？ 人参」

「はあっ？ 平気だったの」

強がっているが、なかなか口には運ぼうとしない。やっと口に入れても、殆ど噛まずに飲み込んだようだ。

そんな様子に、つい、笑みが漏れてしまい。

愕然とする。

これでは、まるで普通の友人たちと居るようではないか。

既に、捨て去った筈の日常。

それに近い物が、ここで広げられている。

だから、つい言ってしまった。

「どういうつもり？」

言葉の先は、楯無だ。

彼女は、飄々とした笑みを浮かべ、こちらの言葉を平然と受け止めた。

「どういうつもり、とは？」

「わざわざ手料理食べさせて、それが済んだら帰っていく。なにをするでも無し……ずっとこれの繰り返しだわ。一体、何の狙いがあるのよ」

「狙い、ねえ。そうねえ、良いわ。そろそろ聞いてみようかしら」その言葉と表情に、サイクロプスは内心で驚きを得る。

……まさか、こちらから切りだすのを待っていたのかしら。だとしたら、この少女。見た目以上に切れ者かもしれない。

あくまでも、話を振ったのがこちらならば、楯無はそれに応えただけという正当性が生まれる。

例え、どんなにこちらに都合が悪い話でも。しくじったか。

そう思い、サイクロプスは次に来る言葉に構えるが。

「貴方達、私の下で働く気はある？」

「ふざけんな？」

怒声。

それを放ったのは、ゲイルだった。

立ち上がる。

ちゃぶ台が揺れ、グラスの水が少し零れる。

メインが、明らかに怯えたのが見えたが、ゲイルはそれを無視した。

「てめえ、それが狙いか。今までさんざ飼殺しとして、こちらの気が緩んだ瞬間に籠絡ってか。……ハッ、とんだ糞餓鬼だ。末恐ろしいねえ……」

やれやれ、と芝居がかった動作で首をすくめる。

「言つとくがな、あたしはてめえに心を許した訳じゃないぜ。

それとも、てめえは良いのかい？ あたしらは、てめえのお仲間を殺してるんだ。そんな奴らを、許すと？」

……そうさ、許せる筈がない。

そう思い、楯無を見る。

そこにあるのは、無表情だ。

「許せるか？ 何を言ってるのかしら。許すわけ無いじゃない」  
楯無は、続ける。

「私が貴方達に望むのは、貴方達の素性と情報よ。それと引き換えにして、そうね、貴方達の命を、助けてあげてもいいって言ってるのよ。……あら、まさか私が情けをかけたとでも？ だとしたら、相当のアマちゃんね」

……なんだと。

ゲイルは、己の心が冷えて行くのを感じる。

こんな感覚は、今までにも覚えがある。

それは、気に食わない糞野郎に銃口を向け、引き金を引く瞬間だ。  
殺意。

ゲイルは、無言で動こうとして。

「座れ」

静かな、しかし強制力のある声に動きを止められた。

ブレードだ。

見れば、既にカレーは空になり、僅かにルウが残っているだけだ。

だが、そんな事はどうでもいい。

「……てめえ、何様だ？ 言っとくが、てめえにあたしを止める権利は無いぜ、普段言う事聞いてやってんのは、あくまで戦略上の事だ。こんなところまで、リーダーシップかい？ 真面目な事で」

……普段大人しくせして、こんな時だけ偉そうに言いやがる。

既に、ゲイルの殺意はブレードにも向いている。

ゲイルとしては、先の戦闘において碌に役目を果たさなかったこのオンボロ司令塔に対して、最早有用性を感じていないのだ。

一方、ブレードは何処吹く風といった風体で。

「違う。ここで短慮に出ようとした仲間を止めているだけだ。……」

お前の行動で、他全員の立場が危険になるんだ。わざわざ、敵の方から交渉を持ちかけてきたんだ。聞く価値はあるだろう？」

見れば、楯無は静かな笑みを浮かべていた。

交渉、という言葉が出た時、表情には確かに喜の感情が浮かんだのも、分かった。

……ちつ。

気に食わない。

気に食わないが、なるほど、理解できた。

「……わかったよ。どうやら、あたしをただ怒らせに来た訳じゃ無さそうだって事はな。ただし」

座りこみながら、楯無を射抜く。

明確な殺意を乗せた視線で、だ。

「こちらに、有益な交渉で無い場合は 分かるな？ ISだけが、人を殺す手段じゃないんだ」

突音。

乾いたそれに、楯無が視線を向けた。

そこには、畳に深く突き刺さったスプーンがある。

ゲイルは、ブレードから奪った二本目を、手で弄びながら続ける。

「言えよ。あたしに、何を望んで、その代わり何をくれるんだ？」

楯無は、頷いた。

「ええ。これから教えるわ」

「まず、第一に、こちらが望む事を明確にしていきましょうか」

言いながら、楯無はあるものを取り出す。

板状の白は、小型のホワイトボード。出雲社製の、『書きなぐりんちよ』だ。

備え付けの、黒色ペンで、楯無は文字を書いて行く。

「まずは、貴方達が持っている、全ての情報」

その1 情報の開示

「知っている限りの事で構わないし、言いたくないならそれでもいいわ」

これは、本心だ。

そもそも、嘘を吐かれたとして、こちらに確かめる手段は無いのだ。だから、正確には。

……彼女達の、裏に居る者が居るかどうか。そして、それはどんなものなのかを知る。

間違い無く、彼女らは組織の一員、それも末端だろう。有益な情報は、知らされてない可能性すらあるのだ。

「そして、二つ目」

楯無の書いた文字に、ゲイルが一瞬眉を跳ねあげる。その内容は。

「貴方達に、こちらの戦力になってもらう事」

その2 戦力の提供

これこそが、今回の目的の主だ。

楯無家に、唯一足りないもの、それは。

……絶対的な、攻撃力。

その事を、楯無は一週間前に学んだ。

私兵部隊は、存在するが、あくまでも自衛の為ぐらいにしか使えない。

さらに言えば、ISでも出てくれば、一瞬で滅ぼされるのだ。

アレックスに、頼るわけにはいかない。彼は、そもそも違う世界の住人で、この世界のいざこざに巻き込んで良い存在ではない。

また、彼の様なものがおおっぴらに出てくれば、さすがに更識にも不都合が起きる。

……IS委員会から、目をつけられるわね。

単騎で、複数のISを相手取り、完勝する兵器。そんなものが存在すると知られば、待つのは弾劾の末の、破滅だ。

だからこそ、ここで自由に動かせ、尚且つ強力な私兵が欲しいのだ。楯無には、一つの目的が生まれていた。

簪にすら明かしていないそれは、この一週間で生まれたものだった。その為に、楯無は彼女達が欲しい。

例え、許せない敵であったとしてもだ。

「他にも、細々としたものはあるけど、まあ、これが主な物ね。なにか質問か？」

「私たちを、体の良い傭兵として使っつもりか」  
間髪入れずに来た。

それは、黒髪の女。ブレードから放たれたものだ。

傭兵、という言葉聞いて、ゲイルが明らかに反応したのも見えた。

……やはり、来たわね。

ブレードという女。

彼女が、この交渉におけるキーパーソンであり、また最大の壁であると楯無は思っている。

彼女に対する印象。

それは、軍人。

受け答えや、所作は、明らかに訓練を積んである無駄の無い物で、この前、検査と称して身体を見たら。

…… 実に、引きしまった良い身体…… じゃないわ、何考えているの。雑念は、振り払う。

彼女の身体は、戦闘用に作られたそれだ。しかも、この前離を覗いた時など、室内でもできるトレーニングを行っていた。それは、激しいものではないが。

…… 身体を保ち、スペックを維持する為の物。

恐らく、彼女は元軍人。それも正規軍の。

また、実はゲイルについての素性も薄々分かってきていた。

粗暴な性格もあるが、彼女には常に殺気が纏わりついている。

そして、血の匂い。

人を殺しなれた者特有の、身を竦ませる様な雰囲気だ。

また、動き一つ一つにも芯が通っており、常に警戒が滲んでいる。

さらには、食事を持って行った時の反応だ。

皆が食べ始め、しばらくしてから食べ始める。その割には、必ず完食するのだ。

食事というものの危険と、重要性を知っている。極めつけは、この前の検査と称した身体調査。

……体中、傷だらけだったわね。

銃創、刺傷、火傷の跡。拷問を加えられた様な跡もあった。

そこから導き出されるのは、彼女が傭兵、もしくはそれに準ずる事をしていたという事。

……だからこそ、やっかいで。その分、この二人は確実に欲しい。手綱を掛けようとは思わない。掛けられるとも思わない。

だが、もしこの二人を仲間として加えられれば、必ずや大きな助けになる。

楯無は、だからこそ慎重に。しかし、堂々とした態度で言う。

「傭兵、ね。……あなたがそう思うなら、そうなんでしょう」

瞬間。

……！

殺された。

そんな、錯覚すら覚えるような、冷たい感覚。

ブレードが、視線に乗せ、こちらに叩きつけてきたのだ。

……怯むな！

怯めば、それだけ負い目がある事を示すような物だ。故に、楯無は耐えた。

彼女を、傭兵で無く、仲間とする為に。

数秒。

楯無にとっては数時間にも及ぶような、時間。

ブレードは、こちらの様子を見て、どこか感心したように見える。

即座に、楯無は言葉を放つ。

「ここで、はつきりさせておくわ。私は、貴方達を傭兵として扱うつもりは無い。仲間として、迎え入れようと思っているわ」

「許さねえのにか？」

ゲイルの、疑問。

「ええ。何故なら、貴方達に殺されたのも、仲間だからよ。仲間を殺した相手を、許す事は死んだ彼らへの侮辱だわ」

「そんな者達を仲間にする方が、よっぽど侮辱じゃないのか」

ブレードの、試すような目線。

……いいわ。なら、それに応えましょう。

「違う、と断言するわ。確かに、貴方達は許さないし、私たちに許されない。だけど、それは今の貴方達が敵だから。そして、敵である以上はそれらの憎しみは終わる事が無いけれど」

一息。

「仲間となっていれば、それらはいつか、違う物によって書きされるわ」

「ならば、それは何だ？ 憎しみや、許せないすらも上書きする物とは!？」

答える。

「信頼よ」

楯無は、感じる。

この部屋の全ての視線がこちらに集まっている事を。それを、自覚した上で言うのだ。

「いいかしら。私が貴方達に与えられるもの。それは、金銭であり、日々の安全であり、仕事よ。そして、それらに先立ち、またそれによって生まれるのは信頼だわ。信頼は、さらに多くの物を与えてくれるわよ？ それは、やりがいであり、仲間であり、誇りだわ」

いいかしら？

「私自身が与えられるのは、始まりの信頼と、さつき挙げた即物的な物だけよ。それに付随するものは、その後に来るものだけど、それらは全て、貴方達が自分の手で掴み取れる物よ」



聞け。

「そうして、貴方達の中に、ため込まれた物。それらが行きつく場所、どこかしら」

楯無は、手を広げる。

まるで、迎え入れるように。抱きしめるように。

「それは、信頼を与えた者へ、よ！ 私が望む、最後の物、それは

」

その3 貴方達からの信頼

「そうして、受け取った信頼を、私はまた貴方達に返すの。一つのサイクルが生まれるでしょう？ 物はいつか無くなるけれど、これは、貴方達から放棄しない限り永遠に回り続ける！ そうして、それは無限に広がっていく！ 仲間となるメリット。それは、永遠の信頼のやり取りよ！」

さあ。

「どうするの？ 今ここで問うわ。貴方達は、ただの傭兵になり下がるの？ それとも、仲間として手を取るの？」

問いに、帰ってきたのは沈黙だ。

室内を、張り詰めさせるそれは、不意の音によって破られた。笑い。

それは、ブレードの口から放たれていた。

卑下や、見下しは一切含まない、純粹な笑いだ。

「はは、すまない。あまりに愉快だったものでな、いや、久しぶりだよ。こんな気持ちを抱いたのは」

続ける。

「そうか。私達に与えるだけでなく、与えさせるというのか。はは」

ブレードは、笑みを止め、こちらを見据えた。

楯無は、それを受け止める。

「その、信頼。真実か？」

「誓うわ。自分自身と、貴方達に」

「そうか」

それだけ言って、ブレードは満足したように笑うと。

「了解した。その話、受けさせてもらおう」

………どういう事なのかしらね。

自分も、楯無の言葉を聞いた。

そうして、生まれた何か。これは一体何だろう。

仲間となれば、それは分かるのだろうか。

………ブレードが笑うとこなんて、始めて見たわね………。

彼女の中でも、自分と同じ物が生まれているのだろうか。

自分なりの答えを出そうとした瞬間。

「くだらねえ」

ぽつり、と。

「何が、信頼だ？ 何が、永遠だ？ そんなもの、あたしはそもそも

も知らないんだよ」

ゲイルが、立ち上がっている。

その表情は、怒っているようで。

………泣いている？

涙も、顔の赤みもないが、サイクロプスには、確かにそう見えた。

そうして見れば、いつもは恐ろしさすら抱かせる彼女が、やけに小

さく見えた。

「知らない物を、どうやってくれるってんだ。それに、形はないだ

ろうが」

「形なら、あるわ」

楯無が、静かに言う。

「そうね、いまは確かにないでしょう。ただ、これだけは言えるわ。

この信頼が導く所。それは、この世界そのものを変えるわ」

………世界、って。

随分と、大それた話だ。

気でも狂ったのかと、思い、しかし。

……それは、きっと、素敵でしょうね……。

「いいわ」

「！？ てめえ」

ゲイルの戸惑いも、今は余所に、サイクロプスは答えた。

「必ず、それを見せてくれるんでしょうね？」

「見るのは、貴方達よ。私が見せるんじゃないわ」

「そう、わかったわ。私も、受けましょう」

そこまで言つて、サイクロプスは見た。

いつの間にか、呆然とした表情で、しかし確かに顔をあげていたマインを。

その表情が、あまりにもおかしくて。

つい、らしくもなくこんな言葉を言ってしまうのだ。

「どう？ あなたもいつしよに来なさいよ」

……わたし、は。

マインは、信じられないという気持ちに頭を支配されていた。

今までだって、甘い言葉をかけられて、その結果何度も踏みにじられてきた。

だから、自分は誰も信じないし、それでよかった。

今の話だって、戯言だ。

信頼など、そんなものが、あるとは思えない。

……今更、誰を信じろって言うんだ。

今更、誰に自分が信じられるというのだろうか。

信じていた力には、裏切られた。

あの、竜。

まともに、相手すらされなかったのだ。

情けすら、掛けられたのだ。

涙すら。

……涙？

ふと、思う。

これまでに、涙を流した事などあっただろうか。

一組の男女に捨てられ、あちこちで厄介者扱いされてきた。

ISも、自分には答えてはくれなかった。

だが、そんな時。

自分は、涙を流していなかった。

泣けば、何かが崩れるようで。

……何も、崩せるとは思っていなくて……！

そこまで考えた時、不意に視線を感じた。

見ている。

たしか、サイクロプスというコードネームの女だ。

何の用だろうか。そう思っていた時、告げられた。

「どう？ あなたも一緒に来なさいよ」

「ッ??？」

震えた。

確かに、心が震えたのだ。

目の前に、差し出されたのは、手。

白く柔らかなそれは、自分の物とは違う。

そんなものを、向けられている。生まれて、初めて。

「あら」

気が付けば、その手を取っていた。

包みこまれる。

暖かい。

その暖かさが、何かを崩していき。

「ひぁ……」

マインは、声を上げて泣いた。

まるで、産声を上げるかのように。

大きな声で、泣いたのだ。

ゲイルは、見る。

皆が、あちら側に言ってしまった。

……関係無い。

そう。自分にとっては関係の無い事だ。

今、戸惑った表情のサイクロプスの胸に顔を埋めて泣いているマイン。

彼女は、自分と似たような雰囲気を持っていた。

それが、孤独という物であることに気が付いてからは、彼女を視界に入れる事すら嫌だった。

そんな彼女も、あちらへ行くのだろう。

……そうかい。良かったなあ、その程度で済んでいて。自分は、そうはなれないだろう。

最早、捨てた物が多すぎる。

拾おうとすれば、それは血に塗れてこちらの手を染めるのだ。気付けば、全身真っ赤。

血。

それは、浴びるほど見てきた。

自分が流した。

自分が流させた。

そんな自分が。

……今更、行けるかよ。

もう、関係無い。

ゲイルは、申し出を断ろうとして。

「ねえ、貴方。どうして貴方は、泣く様に叫ばないの？」

不意に、声をかけられた。

楯無。気に食わない女だ。



「その怒りが向く対象なんて、どうでもいいんでしょう？ そんな物、感情とは言わないわ。感情って言うのは、何かに対して起こる物よ」

ねえ。

「貴方は、確かにあの時、感情を爆発させたわ。私と一緒になら、それを、これからも体験させてあげられるわよ？」

「……………」

ゲイルは、黙った。

そして、考えた。

自分が生き延びるために必要な事柄以外を、初めて考えた。

「……………金は、貰えるんだろ？ 後、飯も」

「ええ。私を喜ばせれば、特別ボーナスだって出るわよ？」

楯無の、茶化した口調。

しかし、それにゲイルが苛立ちを覚える事は無かった。

……………分かったよ。観念してやる。

「……………あくまで、働くだけだ。それに見合った物をよこす限り、あんたをボスと呼んでやるよ」

「ええ、これからよろしくね」

楯無の、笑み。

どうやら、自分は完全におかしくなってしまったようだ。

……………なんとか、全員が了承してくれたわね。

正直、難しいかとは思っていた。

しかし、どうやら彼女達の求める物を、自分は示す事が出来たらしい。

……………裏切らないように、しないと。  
誓う。

もう一度、自分の命に。

それすら出来ないようでは、更識楯無は務まらないのだ。

「ともかく、貴方達に部屋を用意するから」

そこまで言おうとした時だった。

聞きなれた声が、聞こえた。

「お嬢様！ 失礼します！」

「どうしたの、虚、そんな慌てて」

飛び込んできたのは、虚だ。

その表情は、明らかに慌てたもので。そして、その口から出た言葉は、楯無を驚かせるには、十分な物だった。

「アレックス氏が、目覚めました！」

アレックスは、夢の中に居た。

夢であると、確信した理由は簡単だ。

目の前に、最早会えない彼女がいる。

……竜美。

黒の長髪を背に流した、どことなく泣き顔に見える顔つきの、女。何故か、右肩から先を機械の物にしているが、紛れもなく彼女だ。

「誰か、いるの？」

気付く。

彼女の視線は、こちらから微妙にずれている。

……こちらが、見えていないのか。

ならば、それでいい。このまま立ち去ろう。

アレックスは、彼女から背を向けた。彼女とは、最早会ってはならないものだ。例えそれが夢の中でも。何故ならば、自分は彼女に証を託した。それは、決して過去に浸る為の物ではない。

前を向いて、共に歩む為の物だ。



……それが、こんな。

まるで、自分が弱いと言われているようだ。

残してきた女の事を、いつまでも引きずる情けない者と。

行ってしまうおう。そうすれば目が覚める筈だ。

そう思い、歩きだそうとした時。

「そこに、いるの？ アレックス」

……！

声を、掛けられた。

しかし、彼女から自分は見えていない筈。

ならばこそ、これは夢なのだ。夢である筈だ。

死者と、会話が出来る概念など存在しない。

1st-Gには、死者の魂が眠る鎌が、3rd-Gには、冥府の概

念があるが、それらはいくまでも死者達の物で、生者とは交わらな

い。交わってはならない。

そうすれば、今傍に居る者達から顔を背けることになるのだから。

だからこそ、自分は仲間に対して力を使ったのだ。

……自分達が、傍に居ると。

彼女に対しても、同じなのだ。それを、こんな夢を見るなどと、彼

女への裏切りに等しい。

歩みを、さらに進めようとして。

「今貴方、多分話も聞かずにどっか行こうとしてるでしょうけど待

ちなさい！」

……見えてない、筈である、よな？

ともかく、機は失われた。

諦めるように、アレックスは彼女に向き直る。

居る。

自分の知る、彼女が。

「そこに居る？ 居るわね、多分。居ると信じて話すけど。……と

りあえず、久しぶりって所かしら」

彼女は、語りだす。

「見ての通り、私は今、それなりにやっってるわ。その事に付いて、まずはお礼を言わなくちゃね。まだ、刃物は握れないけど、身体も大分動くようになってきたし、そうね、あの後色々あったわ。あの後、すぐ、そうよ。貴方に感化された所為で、私の右手こうなったのよ、どうしてくれるのかしら」

……相変わらず、理不尽であるな！

自分は今、礼を言われていた筈だ。何故、怒られているのだろう。釈然としない物を感じながら、しかし。

……懐かしいので、あるな。

この感じは、覚えている。

彼女も、そうであったようで、軽く笑みを漏らすと。

「……そうねー。この腕の事とか、色々あったわ、あれから。UC ATはまだ残っているわ。竜司君達は、自分達の道の為、抜けて行ったけど。でも、今度集まるらしいから、また何か馬鹿な事をやるんでしょうね。私と命刻は、軍の後始末。主任も、元気よ。最近腰痛めてひいひい言うてるけど。命刻なんかは、やけに張り切っちゃって、今度、各Gの居留地を回るんだって。ホント、若いつてのは良いわねー」

いきなり老けこむな、竜美。

「……今、なにか失礼な事を考えられた様な気がするわ。まあ、私たちはそんな感じ。あなたは、今どうしているのかしらね」

……吾輩は。

今は、こんな夢を見ている。

情けない。

正義は確かに取り戻している。魂も、決して腐る事は無い。だが。

未だ、彼女への未練が捨てきれないのだろうか。

……彼女の下へ、帰りたい、などと……！

これでは、前を向いて歩く彼女に申し訳が立たない。そんな風に、思う。

しかし、彼女は言う。

「まあ、貴方の事だもの。きっと、相変わらず正義を名乗って好き勝手やってるんでしょうね。でも、そうね。もしかしたら、寂しいなんて思っているのかしら」

……それは、

無い、とは言えなかった。

二度と会えないと思っていた彼女を目の前に、自分は揺らいでいる。また、彼女を守る為、帰りたいと。

「本当は、今でも貴方の事思い出すわ。私も、もつとずっと一緒に居たかったけど。……でも、こんな夢を見るって事は、まだふつきれてないのね、きっと」

……そんな事は、ないのである。

彼女は、現に今こうして、前を向いているではないか。

自分は、弱いのだろうか。

しかし、彼女は言うのだ。

「でもね、良いんじゃないかしら、それでも」

……！

「前を向くって事は、決して過去を捨て去る事じゃないわ。過去は、確かに後ろにある物だけど、それは紛れもなく自分を構成する一部なんだから。……随分と、考えが変わったでしょう？ 貴方のおかげよ、アレックス」  
彼女は続ける。

「だからこそ、貴方にお礼を言うの。……有難う、今まで守ってくれて。私は、もう前を向いたわ。それは、後ろに貴方の過去があるからよ、アレックス」

……そうか。

アレックスは、思う。

何を、柄にも無く怯えていたのだろうか。

そう、きつと自分は怯えていた。

空も、海も、人ですらも異なる異世界において、自分は腑抜けてい

たのであると。

……思い返せば、確かに吾輩、テンション低めであったな！  
自分らしくも無い。

その事に、今気付き、しかしアレックスは思う。

……ならば、今これからは、吾輩はさらに強くなるものである！  
そう。

なにを、彼女との思い出に怯えていた。

それを直視する事で、弱くなるのではないかと。

馬鹿馬鹿しい。

自分を、定めてくれた物こそ、彼女との証であったにも拘らず。  
ならばこそ。

「だから、過去の貴方を、貴方に返しませう。そして、今の貴方に言っわ」

一緒に、行きませう。

……ああ、行くのである。

最早、過去は己の中にある。

彼女の過去は、彼女の中にある。

そうして、前を向くのだ、何時ものように。

「そろそろ、この夢も覚めるでしょうし、じゃあお互い頑張りませうか、適当に。アレックス」

行ってらっしゃい。

……行って来い、竜美。

その瞬間、アレックスは引っ張られるような力を感じた。

夢から、覚めていくのだ。

……行くのである……！！

彼女に残した思いを礎に。

今の自分を、未来へと突き進めていく。

どうしたんだ？ やけに嬉しそうな顔をして。  
ふふ、どうしてだと思っ？ ……夢の中で、懐かしい顔に会ったのよ。

それは……。

彼、柄にも無く寂しそうだったわ。おかしいわよね、もういない筈の彼を、思ってたこんな……。そう思ったから、彼が見えてない振りまでして、わざわざ発破掛けてやったのよ。あの時とは、逆ね。そうか、……。そうだな。

ごめんなさいね。貴方にこんな話。

いや、いいさ。おかげで私も思い出したよ。それに、今お前は前を向いているんだろ？ そして、お前の中で、あいつも。

そう、ね。そうに決まっているわ。それより、これから時間ある？ 焼き肉行きましょうか。

太……、分かった、私が悪かった。何でも無い。

まず目に入ってきたのは、知らない天井だった。そして、身体に柔らかい何かが纏っている感覚。違和感。

それがなんであるかを悟る前に、動きがあった。

自分の、前脚に感じる、重み。

それが、動いている。

「ん……うん、寝ちゃっ、た……？」

それは、少女だ。

目が合う。

アレックスは、彼女を知っていた。

「どうした、簪」

「あ、ああ、あああ、……。」「  
そうして。」

耳元で己の名前を叫ばれるまで一秒前。  
それに思わず前足を、頭にあて、違和感に気付くまで三秒前。  
自分の身体が、変わっている事によく気付くまで十秒前。  
虚と呼ばれていた少女が、部屋を駆け出ていくまで十五秒前。  
簪に飛びつかれ、ベッドから転げ落ちるまで三十秒前。  
皆がやってきて、簪の上に覆いかぶさる半裸の自分という状況を見られるまで六十秒前。  
問答無用の楯無の蹴りを顎に喰らい、さらに三日間寝込む事になるまで六十五秒前。

八月も末に近づいた頃。

蝉の鳴き声をバツクに、アレックスはガレージにいた。  
今は、機竜の身体に戻っている。

外に比べ、暗く籠った空気。

残暑が厳しい今では、ここでの作業は中々に堪える物があるだろう。  
もつとも、今のアレックスには関係の無い事だったが。

『む、そこは違う！そこは赤に塗るのだ！』

「ああ！？別にいいだろそれくらい！」

アレックスは、塗られていた。

用いる色は、赤、青、白の三色。

かつての自分のカラーリングを再現しようとしているのだ。

……あの後。

起きたら、やけに落ち込んだ様子の楯無と、猛烈に起こった表情の簪がいた。

傍には、所在なさげに立っている、四人の女。

今、自分を塗っている、元敵達である。

『亡国企業』という悪の組織に所属していた戦闘員たちだ。

どうやら、楯無が仲間にしたらしいが、それに関しては別に思う事

は無い。

いま大事なのは、己の正義ペイントなのだ。

『ぬ！　そこも違うぞ、そこは赤と白のストライプだ！』

「だあああああつ？　こんな仕事聞いてねえぞボス！」

「ゲイル、あんまり騒がないでよ、暑くなるじゃない」

「うあー、暑いー」

「……我慢しろ」

……賑やかだ。

かつて、こんな事があつたと、思い出す。

あの時は、詩乃が麦茶を持ってきて、主任らが争っていた。

それを、命刻と竜美が、呆れて眺めていたものだ。

アレックスは、思考を過去から現在に切り替える。

考えるのは、自分の体の事だ。

どうやら、自分は人間の身体へと変形　語感的に、変身が望まし

い　が出来るようになったようだ。

かつて、捨て去った生身。

アレックスは、それを自然に受け入れた。

最早、過去は共にあり、今の自分こそが自分なのだから。

そうして、色々試した結果は、本当に人間としての機能を持っている

るとい事だ。

またその形態だと、非常に燃費が良い。機竜に比べて、という事だ

が。

損傷も、軽い物なら人間形態になっていけば治ってしまう。あまり

大きな損傷だと死ぬが。

特に、味覚が復活した事は喜ばしい。

今度、楯無に実家のフライドチキンの製法を教えてやろうと思う。

しかし、痛覚や、生理現象は困りものだ。

今まで気にしてこなかった分、慣れるのに時間がかかった。

……どうやら、エネルギー補給は食事でも可能になったようで助か

るが。

原理は不明だが、秘かに不安だったエネルギー問題も解決した。その為には大量に食う事になって、楯無を困らせていたが、そう。

アレックスは、更識家に留まっていた。身体を調べる必要もあるし、何よりも。

……孤独に逃げる事は、止めたのだ。

正義の味方でありながら、孤独を選ぼうとしていた自分を殴り飛ばしてやりたい。

もつとも、正義は間違わないのだ。

ただちよつと、考えていただけなのだ。そうなのだ。

既に、心は決めた。

あの夢、もしかしたら、夢では無かったのかもしれないが、あれから決めた。

この世界でも、正義の味方を完遂すると。

それも、一人二人では無い。

この世界で、泣く者全てに対しての、正義の味方だ。

……前よりも強くなる吾輩に、出来ぬはずが無い！

そう断じる。

その為には。

『ぬう、この正義ボディーを完全にせねばならんのに……！』

「ちつくしよおおおおおつ！ なにが悲しくてこんな事を！」

「言わないで。私、何も考えない事にしてるんだから」

「暑いー」

「……」

少々、うるさい。

「ふふ、どう？調子は」

気が付けば、自分の顔のすぐ横。

『楯無か』

「ええ。大分出来てきたわね」

見れば、すでに八割方ペイントは完成している。



『済まぬな、わざわざこのような事を』

「いいのよ。……貴方も、どうやらやる事決めたみたいだしね」

『貴様もな』

二人で笑いあう。

しかし、不意に楯無は、真剣な表情になる。

「アレックス。……この前、言った事だけど」

『分かっている。吾輩、ヒューマノイド形態の心臓部に、異物があつたとのことだろう?』

人間形態のレントゲンを取った時。

自身の心臓に当たる部分。そこに、こぶし大の丸い何かが収まっていた。

恐らく、それは。

「賢石だったかしら?」

『うむ。どうやら、吾輩のアレックスフィールドは、それによって発生する物であるようだ』

それが、自身の体の変化を生んだのだろうか。

そして、その能力にも見当が付いている。

……正義と言うキーワードを基に、発生する概念、か。

自分には、おあつらえ向きの力だ。

燃料の消耗が激しく、何度も使えないが。

しかし、これも本来の概念の力とはことなく違うように感じられ。

……まあ、いい。

自分がどのような存在であろうとも、関係無いのだ。

大事なのは、これから生きていくことと、誰かの涙を止めるために戦っていく事。

己の正義は、不滅なのだから。

「皆さん、そろそろ休憩にしましょうか?」

「おお! そうしようや、もう疲れちゃった」

「水」

「ご飯」

「……」

「おい！ ブレードが動かねえぞ！」

「ああ、のぼせちゃってるわ。だれか運んであげて」

「あーあ、かわいそ」

『……貴様ら、中途半端なままで吾輩を放つとくでない？』

声が響く。

それは空へと溶けていく。

広がる青。

無限の蒼穹へと。

「こない天気なのに、どーして私は入院しておるのしょーか  
ー」

決まっている。

あの正体不明機の所為だ。

枕元に立つ同僚が、困ったような笑みを向けてくる。

「レベツカ、その程度ですんだんだから良いじゃない」

「よくなーい！ あの野郎、もし今度あつたらとっちめてやるわ」

そうだ。泣きを見せてやる。ひーひー言わせてやる。

レベツカはそう心に誓うが。

「でも、まだ入院してないと。ISも使えないでしょ？」

「ぬぐう」

撃沈だ。

しかし、それに救いの手は差し伸べられる。

「なら、任務でもやるか？」

「っげ、隊長」

レベツカは、蛙のつぶれた様な声を上げる。

病室に入ってきたのは、軍服を着た男性。

元戦闘機パイロットにして、たたき上げの軍人だ。

今では、我らが部隊のおっかない隊長。

「失礼な事を言うな。だれがおっかないんだ」

「だって、入隊初日にサーキットトレーニング10周とか、死ねますよ」

「そこでへこたれるような奴は、戦闘機どころかISにも乗れんさ」

「鬼、悪魔、鬼畜親父」

愚痴愚痴と文句を言うレベツカに、隊長はため息をついた。

「……まあいい。任務を持ってきたぞ。退院後、すぐの任務だ。その頃にはISも直っているだろうしな」

隊長は、辞令の入った封筒を取り出した。

レベツカはそれを乱暴にあけて取りだし、読む。

「……JAPAN……って、日本ですか？」

「ああ。お前、言ってたよな。正体不明機は、日本の方へ飛んで行ったと」

「はあ……」

「実は、その後消息がまったくつかめんだ。スクランブル発進した各国戦闘機も、皆一様にそいつの影すら捉えられなかったらしい」  
隊長は、軍帽を脱ぐと苦い表情で言った。

「そこで、唯一の目撃者である、お前を向かわせることになった。

他国に先んじて、我が国の為に働け、だとさ」

「ふうん」

気乗りしない感じの返答。それはそうだろう。

隊長自身も、この任務を快くは思っていない。

……もしも、なんの手がかりも無ければ、この隊を潰すだと……！  
完全に、嫌がらせだ。

そして、そんな任務に、大事な部下を向かわせなければならぬ。

しかし、レベツカは気楽な様子で。

「了解しましたー、じゃあ、三日後退院なんで、それまでに用意し  
といてください」

……呑気な奴だ……。

隊長は、胃が痛むのを感じて、顔を歪めた。

共に、行こう。

## 最終章 意志達の向かう所（後書き）

いかがだったでしょうか。

これにて、一巻に当たる部分は終了となります。

次回、少し時間が開きますが、間章という名の日常パート兼伏線回を挟み、二巻へと続いて行きます。

原作は始まってすらいねえ……！

こんな作品でも、楽しんで頂ける人がいたら、嬉しいです。

また、今回は大分毛色の違う話になりました。

更識家に関する事は、殆ど妄想の産物です。原作とはかけ離れているでしょうから、信じないでください。

そして、今回の交渉。

見る人によっては、楯無さんのやりたい事がすでに分かっていたりするのではないのでしょうか。

モブキャラ4人。

こいつらは、これから出てきます。

オリキャラ嫌いの人には、申し訳ないです。

夢。

実は、かなり入れるかどうか迷ったのですが。

アレックスの今後を決定する大きな指針とする為に投入しました。

実は、書いている途中で一旦データが飛び、書き直した際には方向

性が真逆になっていたのですが、却って良かったかなと。

また、それによって、アレックスに細かい変化があるのですが、分かった人は幸せ。分からなければ、それは私の技量不足です。気にしないでください。

そして、レベッカ。

この子も、しつこく出てきます。

まあ、こんな感じで。

これからも、宜しく願います。

「結局、誰が一番自分を証明できたのだろうか」

ここまで読んでいただき、有難うございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1657ba/>

---

正義の機竜は無限の蒼穹に甦る

2012年1月9日00時46分発行